

山口県へき地・複式教育の創造

『へき地・複式・小規模校教育の充実と活性化に向けて』

No.17

平成21年3月

山口県教育委員会

はじめに



少子化、過疎化等の影響から公立小中学校の小規模化が進み、本県においてもへき地指定校及び複式学級を有する小規模校は、全小中学校の約23%、114校となっています。こうした学校においては、複式授業の指導方法や少人数であることを生かした教育課程の編成等、小規模校ならではの課題に対応していくことが求められています。

そこで県教委では、山口県へき地・複式教育研究センター校を設置し、へき地・複式教育の充実・活性化の視点から実践的・累積的な研究を進め、その成果を研究大会や研修会等で普及するとともに、へき地教育振興会とも連携を図りながら情報提供に努めるなどしてまいりました。

本資料も各小規模校への情報提供として隔年で作成しているものであり、今回は、本県で大切にしてきた「よさを生かし、課題を克服するへき地・複式教育の創造」を構成の柱として、編集したところです。

具体的には、第1章でセンター校の取組や小規模校にかかわる教員、保護者、地域の方からの意見等をもとに「へき地・複式・小規模校のよさと課題」についてまとめるとともに、第2章と第3章で「確かな学力を育成するための学習指導法の工夫」、「豊かな心を育むための学習環境の充実」の観点から取組事例を紹介しています。

本資料で紹介した実践は、へき地・複式・小規模校のみならず、規模の大きな学校でも子どもたちへの豊かな学びを保障していくという点から大いに参考になるものと考えております。

おわりに、本資料の作成にあたり、資料提供いただきました編集協力校に対して厚くお礼申し上げ、刊行のあいさつといたします。

平成21年3月

山口県教育庁義務教育課長 中 馬 好 行



目 次

◇ はじめに

I ヘキ地・複式・小規模校のよさと課題 1

- 1 学習指導について
- 2 生活指導について
- 3 教科外活動について
- 4 学校運営について
- 5 その他

II 確かな学力を育成するための学習指導法の工夫 5

- 1 交流学习による確かな学力の育成に向けて
- 2 一人学び・共学びの充実に向けて
- 3 表現力・思考力の育成に向けて
- 4 校内研修の活性化に向けて

III 豊かな心を育むための学習環境の充実 40

- 1 交流学习による社会性の育成に向けて
- 2 小中連携教育の効果的な取組に向けて

※ 学校間交流の実態について（資料） 54

◇ 編集協力校一覧

I へき地・複式・小規模校のよさと課題

1 学習指導について

2 生活指導について

3 教科外活動について

4 学校運営について

5 その他

I へき地・複式・小規模校のよさと課題

小規模校のよさと課題は、学校や地域によって異なる。ある学校では、よさであるが、別の学校では課題となっているところもある。小規模校のよさと課題を一概に述べることは難しいが、ここに示す視点から全体的な傾向をとらえ直すこととする。

1 学習指導について

少人数であることを生かし、児童生徒一人ひとりに応じたきめ細かな学習を進めることができ、丁寧な指導が可能となる反面、多様な意見や考えにふれる機会や切磋琢磨する機会が少ないなど、学習意欲を高めることが難しい傾向がみられる。教師は学習の環境を充実したり、一人ひとりの学力を高めていく指導法を工夫したりするなど、学ぶことの楽しさや喜びを実感させる授業づくりに努めることが望まれる。



ホワイトボードに自分の考えをまとめて発表

よ さ	課 題
☐ 児童生徒一人ひとりに応じたきめ細かな教育を進めやすい。	■ 仲間同士で学力差が顕在化し、学習意欲の減退につながることもある。
☐ 教員との関係が親密であることから、児童生徒一人ひとりに対する教育的効果が大きい。	■ 仲間同士の切磋琢磨や競い合いの機会が少ないので、学習に対する向上心を育むことが難しい。
☐ 複式学級では、間接指導により自分たちで学ぶ習慣を身に付けさせやすい。	■ 変則複式では学級間の学習におけるかかわり合いが少ない。極端に人数の少ない学級では教員とのかかわり合いばかりになるなど、学習が単調になりがちになる。
☐ 発表の機会が多く、表現力を身に付けさせやすい。	■ 多様な考えや意見を出し合い、互いに学び合う活動が展開しにくい。
☐ じっくり落ち着いて考えさせることができ、考える力を身に付けさせやすい。	■ 転出入があったときにカリキュラム上の対応が難しい。

2 生活指導について

児童生徒一人ひとりの実態を把握しやすいので、個性を伸ばし、内面の変化などにも対応しやすい利点がある。反面、人間関係の固定化や大きな集団で学ぶ機会の少なさから、社会性の育成が難しい。

児童生徒の成長を長期的に考えたときに、自立した生活を送るために必要な経験をさせ、その経験を通して身に付けておきたい能力を培うことが望まれる。そのために、「自分に自信がもてる」、「目標をもって生活できる」など、日々の生活を充実させることを心がける必要がある。



全校児童・教員がみんなでレクレーション（特別活動）

よ さ	課 題
☐ 児童生徒一人ひとりの特性を把握しやすく、個性を伸ばす指導を進めやすい。	☒ 固定化した人間関係を改善することが難しい。
☐ 児童生徒の心の変化に気づきやすいので、素早く対応することができる。	☒ 教員と児童生徒の関係が常に近いため、なれ合いの関係になりがちになる。
☐ 異学年とのよりよい人間関係を深めやすい。	☒ 幅広い人間関係づくりが図りにくく、集団生活における協調性や連帯性、社会性を育む機会が少ない。
☐ 仲間意識が強く、絆の強い集団を形成しやすい。	☒ 小規模の小学校から大規模の中学校に入学する際の「中1ギャップ」が心配される。

3 教科外活動について

少人数であるため、行事等での移動や予定外の変化への対応等が素早く行える。また、地域の学校という意識が強いことを生かし、地域に根ざした教育を進めやすい。反面、運動会や文化祭等の行事や、中学校の部活動の運営が難しい。地域の教育素材を有効に活用し、地域社会と一体となった活動を取り入れるなどの工夫が必要とされる。



中学校の部活動の様子

よ さ	課 題
□ 学校行事等で児童生徒が活躍する場を多く設定できる。 □ 自治活動やボランティア活動など児童生徒の思いを反映した活動を仕組みやすい。 □ 校外での活動を仕組みやすく、人数が少ないので受け入れ先への負担も少ない。 □ 地域の方とかかわり合う機会が多いので、世代間の交流を行いやすい。その際に地域のよさや伝統について学ぶことができる。 □ 異学年で学ぶことが多いので、下学年の子どもたちの成長が早い。 □ 地域の教育力を生かした学習を進めやすい。	■ 学校行事では、地域の行事と兼ねたり、小中学校合同で行ったりするなど発達段階に応じて子どもの活躍の場面を設けるよう、運営を工夫する必要がある。 ■ 交通の便がよくない、移動時間が長いなど、校外の活動において移動にかかる保護者への経済的負担も大きい。 ■ 中学校では部活動の運営が困難になりがちで、選択肢も少ないので、生徒の希望や適性に応じることが難しい。 ■ 学校を離れると友達と遊ぶ機会をつくるのが難しい。

4 学校運営について

教職員の少なさから、教職員で連携や共通理解を図り、指導しやすい反面、校務分掌等の負担が大きいことが懸念される。特に、小学校の複式学級においては、複数学年の教材研究や異学年を並行して指導する技術が必要であることから、十分な研修機会の確保が望まれている。



児童の人数を増やし、ＴＴで授業

よ さ	課 題
□ 児童生徒の個性や課題に応じて教職員が共通理解を図りながら学級経営や学校運営を進めやすい。	■ 出張等の際、学校に残る教職員が少ないため、授業等の対応が難しい。

Ⅱ 確かな学力を育成するための学習指導法の工夫

1 交流学习による確かな学力の育成に向けて

2 一人学び・共学びの充実に向けて

3 表現力・思考力の育成に向けて

4 校内研修の活性化に向けて

Ⅱ－１ 交流学习による確かな学力の育成に向けて

１ 取組のねらい

極小規模校における複式指導や少人数の指導では、児童生徒一人ひとりの実態が把握しやすく、個に応じた指導を進めることができるというよさがある。反面、同学年の人数が少ないため、友達同士で考えを広げたり、深めたり、多くの人数を必要とする学習(サッカー、リレー、合唱、合奏等)ができなかったりするなど多くの課題も抱えている。

そのような意味でも近隣の学校との交流学习やテレビ会議システム等の情報ネットワークを活用することで、児童生徒が自分の考えを発表し、多様な考え方にふれ、自らの考えを広げたり深めたりして、より確かな学力を育みたい。

また、交流学习時の学習時間や休み時間など、他校の同学年の友達と一緒に活動することや心を通い合わせることを通して、よりよい人間関係を築こうとする態度を育てることや、同一中学校区内の交流を積極的・効果的に行うことで、中学校へのなめらかなつながりを推進することなどが望まれる。

２ 取組の実例

交流学习、テレビ会議システムを通じた学習の効果（小学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○多くの人数がいる集団の中で生活する機会がないため、多様な考え方にふれることが難しい。	○地区内の学校の児童が、各学校に集まって学習活動に取り組む機会をつくる。 (同一中学校区内の小学校同士の交流学习)
○多くの人数を必要とする体育(サッカー、ポートボール、バスケットボールなど)や音楽(合唱、合奏など)の学習が困難である。	○普段の授業では体験できない多くの人数を必要とする学習活動を仕組む。 (小規模校同士の交流学习)
○極少人数で活動するため、よりよい人間関係づくりの機会が少ない。	○児童が自ら考え、主体的に判断し、行動するように指導する。休み時間や給食時間など児童同士が積極的に交流できる場を設ける。(テレビ会議システムを活用した交流学习)

(1) 交流学习の事前準備

- ① 関係校担任による打ち合わせ（テレビ会議システム、電話）
 - ・学習時間の確認 ・指導単元の確認 ・事前学習の確認
 - ・事前準備物の確認 ・活動場所の確認 ・主指導教員の確認
- ② 使用教材の手配、配布
- ③ 移動交通手段の連絡・調整

(2) 交流の実際

① 第1回目の交流学习（6月、於：C小学校）

- ・低学年は名刺交換など、お互いが言葉を交わせるような学習活動を意図的に設定し、多くの友達と言葉を交わしながら活動することができた。
- ・中・高学年は国語や算数の学習で、集団の中で自分の考えを堂々と述べることができた。
- ・給食時間や休み時間には、自分の夢中になっている遊びやテレビ番組のことなど自由に話したり一緒に遊んだりして交流を深めた。



名刺交換の場面の様子

1名の児童は、他校へ行つての交流学习という緊張感もあって、集団の中で活動することが難しく、担任とプールサイドで友達の活動を見ることに終始した。



② 第2回目の交流学习（7月、於：S小学校）

- ・初めて交流する学校でお互いの名前を知らないため、各学年で工夫して、顔合わせのゲームや活動を行い、人間関係づくりをした。
- ・体育の水遊びでは「大波」や「洗濯機」など多くの人数を必要とする学習活動を楽しむことができた。
- ・昼休みにはそれぞれ同学年の児童と一緒におにごっこやサッカーを楽しむことができた。

第1回目の交流学习でなじめなかった児童も1時間目からスムーズに学習活動に入ることができた。休み時間も、積極的に友達と会話を交わし遊ぶことができた。新しい人間関係に対する不安が薄れ、自信をもって友達とかわることができるようになった。

③ 第4回目の交流学习（11月、於：Y小学校）

- ・保育園で一緒に生活した児童がいる学校なので、スムーズに学習に取り組むことができた。

- ・体育科ではドッジボールやポートボールなどのボールゲームをそれぞれの学年の学習を通して自分の力を精一杯発揮して楽しむことができた。
- ・音楽科では合唱や合奏等、多人数で音を重ねる楽しさを味わうことができた。
- ・全ての児童が友達と会話を楽しみながら和やかに昼食をとることができた。
- ・昼休み時間、友達と積極的にかかわり、遊ぶことができた。



昼休みの交流の様子

(3) テレビ会議システムを活用した交流学习

5年生でテレビ会議システムを活用し、授業を行った。相手校も複式の指導をしている。相手校の指導者が間接指導時に両校の5年生に指導したり、本校の指導者が自校の6年生の指導時に相手校の指導者に指導してもらうなど、きめ細かな指導を一層充実させることができた。

第5・6学年 算数科指導案

(第5学年)				(第6学年)			
1 単元名 垂直・平行と四角形				1 単元名 倍数と約数			
2 本時のねらい				2 本時のねらい			
【テレビ会議システムを活用しての授業】				【児童同士が課題を解決する複式の授業】			
・ 平行な辺の数に着目し、四角形を分類することができる。(平行四辺形, 台形, その他の四角形)				・ 3の倍数と4の倍数を求めることを通して、公倍数と最小公倍数を求めることができる。(公倍数 12, 24, 36・・・ 最小公倍数 12)			
3 準備物				3 準備物			
・ 児童自作の色セロファン製の長方形、ハサミ、テープ				・ 数直線			
4 本時案 (第三次 1／7)				4 本時案 (第一次 2／7)			
前時の学習				前時の学習			
一組の三角定規を使って、垂直・平行な直線を使い、長方形や正方形を作る。				数直線を活用して倍数の意味を理解し、倍数の求め方を練習する。			
指導上の留意点	学習内容・学習活動		形態	学習内容・学習活動	指導上の留意点		
			5年5年				
三角形や四角形を重ねてできる四角形を辺の平行に気をつけて仲間分けしよう。 二つの図形の重なる部分がとらえづらいため、セロファンで制作した図形を使用する。	1 三角形や四角形を重ねてできた四角形を切り取る。 ① 図形を重ねてできた四角形がどの部分であるかが分かる。		つかむ	1 前時までの学習をふり返り、倍数を求める。	・ 数直線を用いて倍数を求める。 ・ 数字を列記していく。時間を決めて練習し、できたら2人で答え合わせをするという学習の約束を確認する。		深める

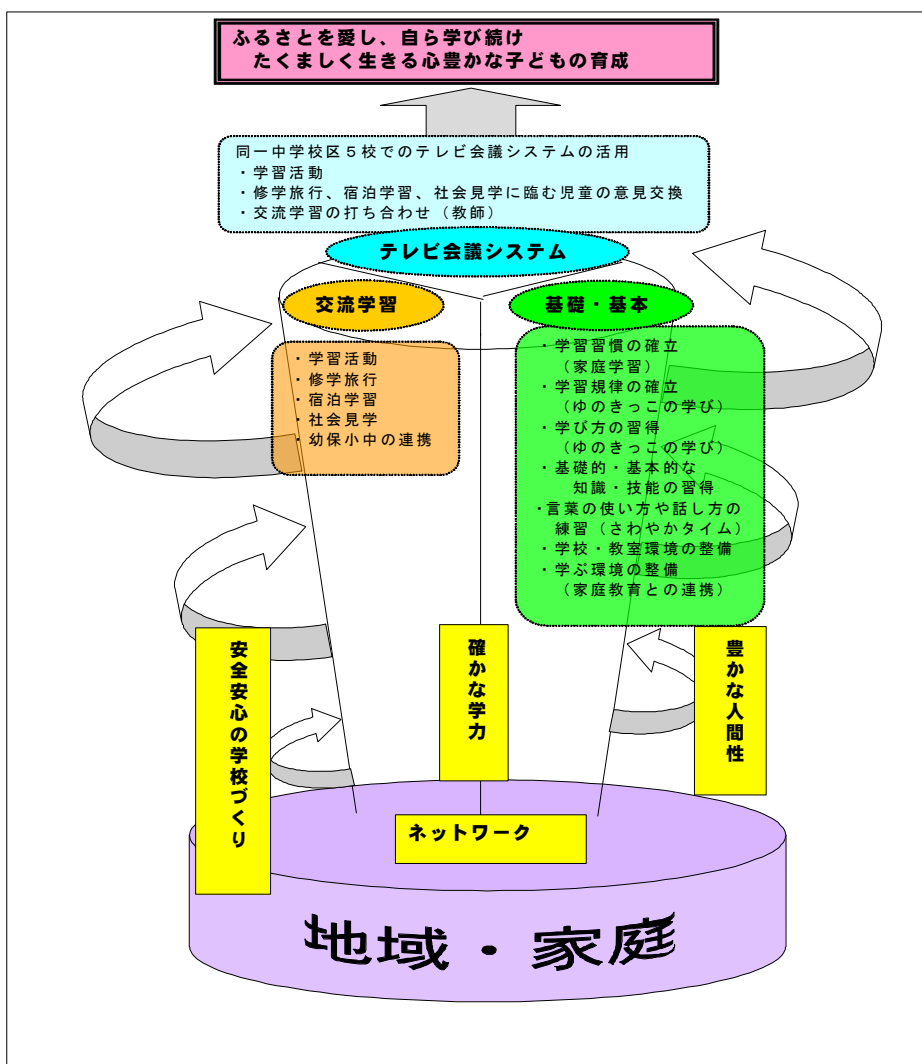
(※形態の網掛け部分は直接指導を示す)

・ はみ出た部分を切り取ることを確認する。	② できた四角形を切り取る。	考 え る	3人1組でも4人1組でも組みかえがうまくいく人数は何人が考えよう。	つ か む	2 3の倍数にも4の倍数にもなっている数を考える。	・ 3人一組で活動する場合には人数は必ず3の倍数であることを確認する。
平行な辺が何組あるかを考えることに目を向け、仲間分けができるよう助言する。	2 できた四角形を仲間分けする。		① 3の倍数を考える		・ 数直線を用い、確実に倍数を求められるようにする。	
実際にできた図形を重ねたり並べたりすることを通して比較・分類させる。			② 4の倍数を考える。		数直線上にある倍数のうち、上下の重なりを見つけることで公倍数を確認できるようにする。	
自分の考えをまとめさせ、他の児童の考えと関連づけながら発表するよう助言する。	4 自分の考えを発表する。		3 自分の考えを発表し、話し合う。 4 公倍数・最小公倍数という言葉の意味を理解する。		3と4の倍数が早くできた場合は、4と8の倍数、4と5の公倍数についても考えさせる	
TV会議システムを使って友達に発表することで、相手を意識して発表させる。		ま と め る	5 ほかの数でも同じようにできるか、確かめる。	深 め る	・ 練習問題をすることで、公倍数・最小公倍数についての理解を深めさせる。	
	5 学習を振り返り、台形や平行四辺形の定義を知る。 					
次時の学習			次時の学習			
本時で仲間分けした図形の辺や角に着目し、平行四辺形の性質について調べる。			本時に学習した内容を活用して、他の数の公倍数・最小公倍数を効率的に求める方法を考える。			

(4) 参考（交流学习とテレビ会議システムの位置付け）

自校だからできることもあれば、自校だけではできないこともある。行事などの学習は、同じ学年の友達をふやしたり、思い出を共有できることから、中学校に進学した際にお互いのことが分かるなど、交流学习の成果は、校種間の連携に大きく役立つ。

また、テレビ会議システムは、交流学习の効果に加え、学力の向上にも役立てることができる。



3 取組を振り返る

交流学习では、自分の言葉で意志や意見を伝える必要性が生じる。その中で自分の考えや自分の思いを表現することや、相手意識のある表現力も着実に身に付けていくことができる。また、体育科での水泳やゲーム運動、音楽科での合唱や合奏など、他校の児童から刺激を受け、学習に活気が出た経験により、自校での休み時間の個人練習に取り組むなど、1回の交流が子どもたちにとっての意欲に結びついていくこともある。

さらに、テレビ会議システムを活用しての交流や、社会見学、宿泊学習、修学旅行など、それぞれの学年の発達段階でよりよい人間関係を築いた経験の蓄積が、中学校へのなめらかなつながりにもなる。このような利点がある一方で、交流学习の受け入れ校の負担が過重にならないよう連絡・調整を綿密にとり合うなど、交流学习による学習活動や内容を工夫していくことが望まれる。

小規模校の中の限られた人数であるからこそ、相手の思いを聞き、相手を尊重しながらよりよい人間関係を築くコミュニケーション力を身に付けていきたい。

Ⅱ－２ 一人学び・共学びの充実に向けて

1 取組のねらい

確かな学力や豊かな心などの生きる力を育む教育を保証していくことが求められている中で、小規模校の子どもたちは、真面目に学習に取り組んだり、互いに協力しながら一生懸命に仕事をしたりしている。また、必然的に異年齢集団での活動が多くなるため、互いの役割を知り、「これは、ぼくがやるからいいよ。」「何か手伝おうか?」「これをお願いね。」と、優しい言葉をかけ合うことも自然に生まれる。これは、少人数であるからこそその丁寧な指導と密接な人間関係があるからである。

しかし、少人数で変化の少ない人間関係の中で生活しているため、特に学習の場面においては「多くの友達のよいところを見て学ぶ」「意見交換によって考えを深め合う」という場面が少ないのが現状である。また、素直で従順な面が、「教師の指示待ち」につながることもあり、課題を自分の力で発見し、主体的に解決しようとする力が十分に育っていないなどの課題もみられる。

子どもたちに現代社会を生き抜いていく資質や能力を身に付けさせていくためには、課題を自ら発見し、見通しをもちながら様々な課題に対して自分から調べたり、自分なりに工夫してまとめたり、さらには諸問題を自分のこととしてとらえ、取り組んでいこうとする「主体的に学ぶ子ども」を育成することが大切である。そのような意味でも、複式学級や少人数の学級では、自分たちで学習を進めることができる力である「一人学び」や人間関係の結びつきの強さを生かした「共学び」を大切にすることが望まれる。

2 取組の実例Ⅰ

主体的な学びを支えるリーダー学習とヒントコーナーの工夫（小学校）

課 題	課題解決に向けた取組のキーワード
○初めての複式学級であり、学力差もあるため、その対応に苦慮している。 ○転出入が多く、児童数や学級数の見通しがもちにくい。 ○間接指導時に子どもたちだけで学習を進めさせることができる力を身に付ける必要がある。	○「温かい人間関係づくり」「学習過程の工夫」「ヒントコーナーの設置」「『学習リーダーノート』を活用したリーダー学習」を推進することで、主体的に学ぶ子どもを育てる。

(1) 取組の概要

① 温かい人間関係づくり

「温かい人間関係」とは、児童がお互いのよさを認め合い、共に高まることができる関係にとらえている。子ども同士の人間関係は、ややもすると葛藤やストレスの原因になり、困難に感じることもある。実際にうまく関係をつくることができず、孤立したり攻撃的にしか関われない場合もある。それは児童の主体的な学びを阻む大きな要因となる。

そこで、AFPYを活用し、児童が何でも言い合え、楽しく、よい関係の中で過ごすことのできる集団づくりに取り組みたいと考えた。

② 学習過程の工夫

複式指導においては、学習の流れをある程度パターン化することも必要である。算数科においては「つかむ」「見通す」「高まる」「まとめる」の4段階を踏まえ、「わたり」と「ずらし」を工夫しながら授業を構成した。

③ 主体的な学びを支えるヒントコーナーの設置

一人学びでしっかりと自分の考えをもつことができれば、共学びの場で進んで関わりをもつことができ、学力の向上を図ることができると考えた。そこで、自立解決のための場(ヒントコーナー)を設定し、児童が自分なりの方法で課題解決ができるように工夫した。

④ 「学習リーダーノート」を活用したリーダー学習

算数科においては、その日の学習リーダーが学習内容や学習の進め方を書いた「学習リーダーノート」を持って授業を進めるようにした。

(2) 実践例

① AFPYを活用した仲間づくり

全校活動や学級活動において、遊びやゲームをとおして協力し、相手を尊重し、思いやる心を育むことをねらいとして取り組んだ。

日々の言動を見直す機会になり、学級づくりや友達との関係にも効果があった。このような機会を定期的に設け、取り組み続けることが大切である。



【ビーイング】クラスでのルール作り



【じゃんけんゲーム】の様子



【みんなで考えよう】の様子

ふやそう！にこにこ言葉	へらそう！イライラ言葉
○あいかどう ○よかったね ○ごめんね ○がんばってね ○ファイト ...	▲へたくそ ▲だまれ ▲ムカック ▲ダサイ ▲うざい ...

みんなで考えた【にこにこ言葉とイライラ言葉】

② リーダー学習を取り入れた授業展開（３・４年 算数科）

学習リーダーに学習の流れが分かるような資料を示し、それに従って授業を進めた。学習リーダーが指示する言葉で、クラスの仲間が活動できるように端的で分かりやすい言葉を精査した。

また、間接指導時には、一人で考え、考えたことが発表できるようにするまでを学習活動とし、直接指導でお互いの意見を発表し合い、教師が指導するように授業を構成した。

一人学びを充実させるためには、学習リーダーが学習課題をはっきり読み上げることや、できるだけ一人で考えること、質問はできるだけしないようにするなどの授業中のルール作りが大切になる。

また、共学びでも、お互いの考えを友達に伝えるように話すなど、日々の積み重ねを心がけた。

3 年		4 年	
○ねらい 千万の位までの数の読み方や表し方が分かる。		○ねらい 小数の加法は、0.1を単位として考えると同じように計算できることを理解する。	
1 本時の課題をつかむ。	つかむ	1 学習を振り返る。	確かめる
課題を読みましょう 課題を書きましょう	見通す	プリントをやりましょう できましたか 答え合わせをしましょう	つかむ
2 千万の位までの数の読み方について知る。	見通す	2 本時の課題をつかむ。	つかむ
教科書35ページを開けてください 3番を読みましょう	高まる	課題を書きましょう	見通す
	高まる	3 立式し計算する	見通す
【一人で考える】	高まる		見通す
できましたか 答えを発表しましょう	とまめる	4 0.4 + 0.5 の計算の仕方をグループで考える。	とまめる
	とまめる		とまめる
【発表する】	とまめる	【グループで話し合う】	とまめる
3 数字カードを使って、大きな数を作って読む。	見通す	Aチームから発表してください	とまめる
大きな数を作りましょう 時間は5分です できたら作った数を漢字で書きましょう	見通す		見通す
自分で作った数字を発表しましょう	高まる	【グループごとに発表】	見通す
	高まる	5 立式し計算する ・帯小数+帯小数	見通す
【何と読むでしょう】	高まる	6 2.5 + 1.3 の計算の仕方を話し合う。	高まる
4 練習問題をする。	確かめる		高まる
できましたか 答え合わせをしましょう	確かめる	【みんなで考える】	高まる
		7 繰り上がりのない小数の加法をまとめる。	高まる
		※吹き出しはリーダーへの指示	

（※網掛け部分は直接指導を示す）

③ 主体的な学びを支えるヒントコーナー

一人学びを支える手だてとしてヒントコーナーを設置した。

子どもの取り組む姿をイメージして、適切と思われる授業中のヒントをパソコンやヒントカードで示した。ヒントコーナーに頼りすぎないように配慮することも大切であった。



ヒントカードによるヒントコーナー

(3) 取組の成果

① 温かい人間関係づくりについて

温かい人間関係は、学力向上の土台である。昨年度よりA F P Yを活用した人間関係づくりに取り組んできた。児童は協力して取り組む活動をと

おして、仲間と心をつにすることや、ルールを

守ること、相手を尊重することなどを学ぶことができた。そして、友達のどんな意見でも受け入れ、一緒に考えていこうという信頼感と安心感のある学級づくりを進めることができた。



具体物やパソコンによるヒントコーナー

② 主体的な学習習慣づくりについて

年度当初より、算数科においては、学習リーダーノートを活用したリーダー学習、一人学びを支えるヒントコーナーの設置、小グループの活用の3点を支援の柱として取り組んできた。学習の流れや学習内容を示した学習リーダーノートを持たせることで、進行役の児童は、学習の見通しをもつことができ、時間を意識して進めることができた。また、教師のわたりの時間がずれても、学習リーダーを中心にノートを活用しながら学習を進めることができるようになった。学習リーダーを輪番制にすることで全員が経験でき、自分の役割や学び方が全員に身に付いてきた。

ヒントコーナーでは、前時までの学習を振り返りながら考えをまとめることができるように、それまでの学習で使用し、児童の考えが書かれたものを掲示したり、ヒントを示したパソコンやカードを設置したりした。自分の考えをもちにくい児童は、ヒントコーナーでヒントを見たり、自信のない児童は、自分の考えを確かめたりしながら一人学びを行い、共学びに臨むことができた。

また、共学びの場でしっかり表現できるように事前に小グループで意見を出し合い、まとめるようにした。そのことで、表現の苦手な児童も積極的に発言することができた。さらに、分かりにくい表現はグループ内で質問し合ったり、一緒に考えたりして表現力を高めることにもつながった。

3 取組の実例Ⅱ

学習マニュアルを活用したガイド学習・リーダー学習（小学校）

課 題	課題解決に向けた取組のキーワード
○間接指導・直接指導時の学習上のルールが必要である。	○『学びのマニュアル』『学習のガイド』によるガイド学習とリーダー学習の取組を充実させる。
○間接指導時に主体的・自律的に学習できる力を育成する。	○自力で学習する力の育成と学習習慣・学習環境を整備する。
○伝え合う力を身に付ける。	○自分の考えを説明する活動を仕組む。

(1) 取組の概要

「主体的に学ぶ子ども」の育成のための手だてとしては、まず子どもたちの学習の場である複式学級で、教師が直接関わるできない間接指導の時間に、「自分たちだけで学習を進める力をいかにのばしていくか」が重要になる。

また、その学びを深めさせるために、自分の考えや友達の考えを互いに知り合い、類似点・相違点を考え、認め合い、成就感・達成感を得させる手段として、「伝え合う力」を発揮させることも必要となる。

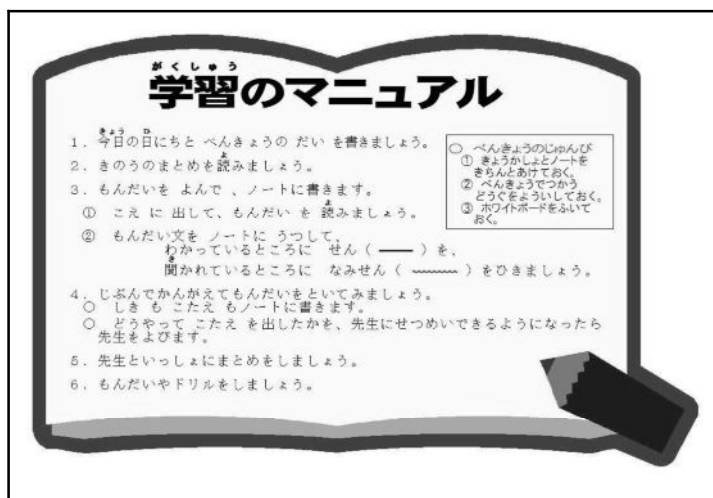
(2) 実践例

① 自力で学習する力を育てる複式指導の工夫（ガイド学習・リーダー学習の導入）

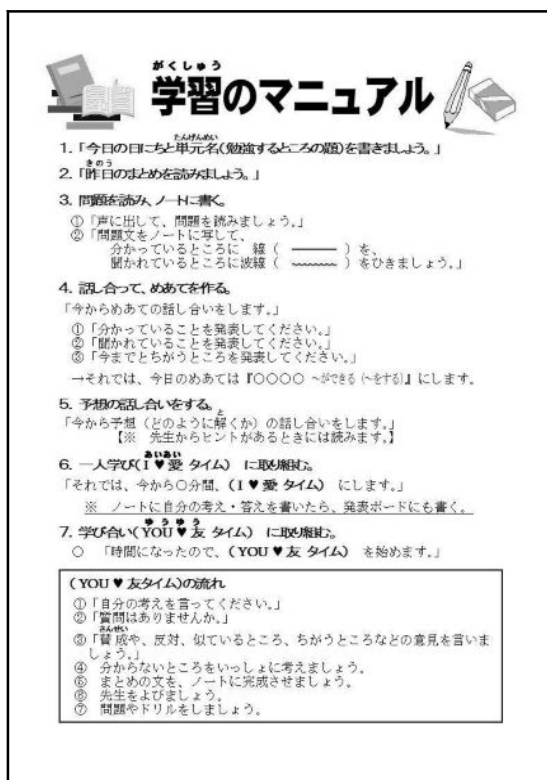
子どもたちが自分の力で学習を始め、進める『学びのマニュアル』や『学習のガイド』を示し、授業の中での活用を定着させることにした。複式学級ゆえに、必然的に各学年の間接指導の時間が半分を占めるわけであるが、その時間をメリットとして捉え、子どもたちの自力学習の基礎としての力を身に付けさせようという試みを行った。

『学びのマニュアル』は、学習の流れや手順を示したもので、主に算数科の学習で活用させ、活動を指示したり進行したりする学習リーダーを決め、輪番制で取り組んだ。基本的には、(1)課題の確認、(2)めあてづくり、(3)一人学び、(4)共学び、(5)補充問題への取組、という流れで構成した。同じマニュアルを繰り返し用いることで、自分たちの力で学習を進めていくことに慣れるように指導した。そうした段階では、学習事項や内容によって教師の指導・指示により構成を変えるなどして、子どもたちの学習に変化を与えることもできた。

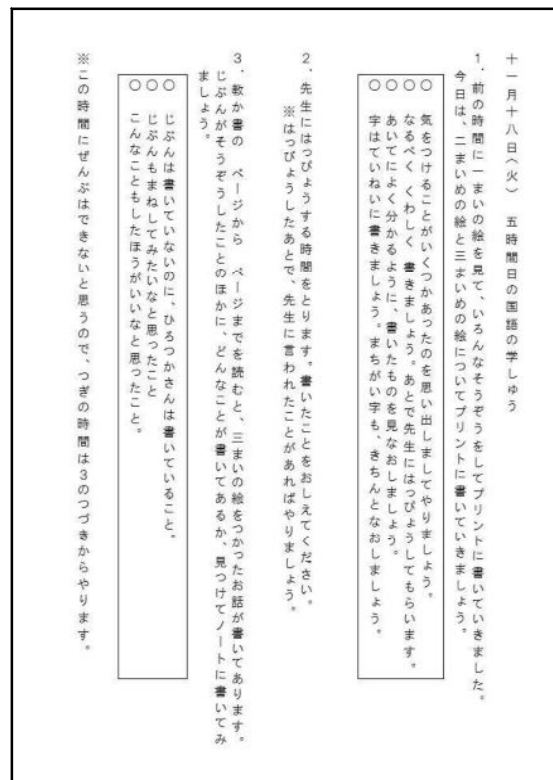
国語科の学習では、課題が多岐・多様であるため、マニュアルで進めることが難しく、『学習のガイド』を主に活用させるようにした。前時までの子どもたちの自力学習や直接指導の様子によって、教師が学習状況の把握をし、それに合わせて授業ごとの学習内容を示したプリント『学習のガイド』を各学年の子どもたちに提示し、自分たちだけで学習を進めていくことができるように配慮した。



資料：算数科で活用した『学習のマニュアル』（2年）



資料：算数科で活用する『学習のマニュアル』（4年）



資料：国語科で活用した『学習のガイド』（2年）

② 共学びの力を育てる複式指導の工夫

間接指導の際の子どもたちの学習形態を2つに分け、それぞれの学びに責任をもたせ、意欲付けを図るようにした。課題に対して一人ひとりで考えを深める活動時間を『I 愛タイム』、また友達との話し合いによって考えを深める活動時間を『YOU 友タイム』とそれぞれ名付け、自分の学びの結果・考えを必ず友達に説明する機会をもたせることで、考えを深める習慣と伝え合う力を同時に育てていくことができるように配慮した。

③ 主体的な学習習慣・学習環境づくりの工夫

ア 授業の中で、発達段階に応じた「読む・書く・話す」という活動を常に取り入れ、基本的な学習習慣が身に付くような学習内容の構成を工夫した。

イ 朝のチャレンジタイム・読書活動（読書ノート指導）・『あたたかいまなざし（詩の暗唱）』への取り組みを奨励し、子どもたちが常に新しい目標を見つけ、取り組もうとする学習の習慣化が図られるように工夫した。



朝の「チャレンジ活動」に取り組む全校児童



『あたたかいまなざし（詩の暗唱）』に取り組む児童

資料：基本的な学習習慣及び『^{あいあい} I 愛タイム』『^{ゆう・ゆう} YOU 友 タイム』を取り入れた実践事例
第4学年国語科 片学年は2学年（変則複式学級）

第4学年国語科学習本時案			単元名「いろいろな意味を持つ言葉」		第1次（1／3）	
教師の支援と評価		児童の学習活動・内容			わたり	
○ 教科書掲載の詩「とる」からクイズを出題し、楽しく考える活動から学習に入ること、言葉に興味を持たせる。		1. 「とるものなあとに」クイズをする。			4年	
「同じ音なのにいろいろな意味がある言葉」について調べていこう。						
☆ 『I 愛タイム』では、 ○ 「□□と同じ意味」というように他の言葉に言い換える形でよいことにする。 ○ 分からないときには国語辞典も活用させる。		2. 教科書P. 30の詩を読み、それぞれの「とる」が、どんな意味なのかを調べ、話し合う。 ☆ 『I 愛タイム』で調べる。 ・ ワークシートにそれぞれの意味を書き出す。 ☆ 『YOU 友タイム』で話し合う。 リーダー：○○くん ☆ 教師と確認する。			共通	
☆ 『YOU 友タイム』では、 ○ 話し合いで自分と友達の考えを確認し、説明の際には動作化も有効に取り入れさせる。		3. 「とる」以外のいろいろな意味を持つ言葉を見つけ、ノートに書き出す。 ☆ 『I 愛タイム』で見つけ出す。				
○ 本学級の児童は言語能力に乏しい傾向があり、個人差も大きいので、言葉見つけが難航する場合には、教師が児童ごとにヒントを与えるようにする。		4. 見つけた言葉を使ってクイズを作り、お互いに出し合う。 ☆ 『YOU 友タイム』で広げ合う。			4年	
○ 「□□なものなあとに」という形式でクイズを作らせていくようにし、ワークシートに例を示しておくようにする。					共通	
○ 多義語の理解を深めるためにも、1つの言葉について最低2～3個を1組としてクイズを作らせるようにする。					（2年） 4年	
本時での基本的な学びの活動		「読む」活動・・・1 「書く」活動・・・2, 3 「話す」活動・・・2, 3				

(3) 取組の成果

当初は教師に依存する学びの姿勢が強く、マニュアルやガイドがあるにも関わらず、すぐに「先生、ここはどうやったらいいんですか?」「分からないときはどうしたらいいんですか?」と自信無さそうに尋ねてくることが多く、『I 愛タイム』の際にすぐにあきらめて学習が停滞してしまうということが多く、学習が成立しづらい状態が顕著に見られた。また、『YOU 友 タイム』の際には、自分の考えがはっきりもてないことから、「何となく」の発言や、相手の意見をただ聞くだけで「話し合い」にならない時間も多かった。

しかし、経験を積み重ねていくごとに、子どもたちは「課題に対する自分の考えをもたないことには学習ができない」ということに気づき始め、考えをもつことにより『YOU 友 タイム』での時間の充実も見られるようになってきた。そのことで、徐々にではあるが、「自分たちだけでも学習ができる、進められる」「自分たちで学習ができた」という充実感が味わえるようになってきた。そして、課題を自分で解決する力の成長も少しずつ感じられるようになった。

それに加えて、継続的に取り組ませてきた『あたたかいまなざし』や『チャレンジタイム』によって主体的な学習意識や基礎の力を培ってきたこと、毎授業の中で「読む・書く・話す」という活動を大切に位置付けてきたことによって、子どもたちは『自力で学習する力』を高めることもできた。

どんな学習であっても、学びは子どもたち自身が行うものであり、子どもたちが身に付けた力を大切にすることで、より一層磨かれ、発揮されていくと考えている。

4 取組の実例Ⅲ

主体的な学習習慣の確立に向けた取組（小学校）

課 題	課題解決に向けた取組のキーワード
○複式学級では、学習の見通しをもって授業を組み立てることが大切である。	○課題を明確化し、課題解決の手順の明示するとともに、自力で課題解決ができるような教材・教具を工夫し、一人学びを充実させる。
○一人学びの力を生かして、主体的な学習を充実させることが大切である。	○自己表現の場を設けるとともに、友達の考えに関連付けたり比較したりして話し合う活動を充実させ、思考力・判断力・表現力を伸ばす。

(1) 取組の概要

① 一人学びの力を身に付けるための取組

子どもたちに一人学びの力を高めるために、次の3点から取組を進めた。

ア 学習課題の明確化

イ 解決方法の手順の明示

ウ 教材・教具の工夫

一人学びを身に付けた上で、思考力・判断力・表現力をさらに伸ばすために、次の3点から取り組むこととした。

ア 表現する場の保障

イ 話し合う力、話す力、聞く力の育成

② 学習習慣の確立に向けた取組

基本的な学習習慣を身に付け、その成果を生かし、一層発展させるために学び方のパンフレットを作成し、全校児童に持たせ、全校で統一した学習習慣づくりに努めた。

(2) 取組の実例

① 学習の流れ

- 単元名：3年 国語 世界の民話を読もう
- 4年 国語 愛の心を描いた物語を読もう

第3学年 本時案 (第2次 3/5)		第4学年 本時案 (第2次 3/4)	
(1) ねらい 時や場所を表す言葉、人物の言動を表す言葉などをもとに、木かげが伸びていくことで、地主とお百姓の立場が変化してきていることをまとめることができる。		(1) ねらい ヤモや父さんの家族への愛や村への思いが分かる文を見つけて、ヤモの家族や村への思いを読み取ることができるようにする。	
(2) 学習過程		(2) 学習過程	
指導上の留意点 評価(☆)	学習活動・内容	指導上の留意点 評価(☆)	学習活動・内容
○ 前次の学習場面 1・2場面【P6L4～P9L6】を一文交代読みさせる。	1 前時の場面を想起する。	○ 当番の児童に本時のめあて、学習の進め方を確認させる。	1 本時のめあてをつかむ。
○ 本時のめあてを確認し、学習の流れを確認する。	2 本時のめあてをつかむ。	ヤモの家族や村への思いを読み取る。	
木かげがのびていくことで、地主とおひゃくしょうたちの言葉や動作がどのように変わっているか調べよう。		○ 句ごとに交代して音読させる。	2 本時の学習部分【P11L1～P13L14】を音読し、ヤモや父さんの気持ちが分かるところにサイドラインを引き、ワークシートに→(矢印)と気持ち、根拠となる文を書き込む。
○ 地主と百姓たちの言動を表す言葉に注意して読み取っていくことを確認する。	3 本文3・4場面【P9L7～P10L18】を音読し、2場面と比べて地主と百姓の問答の変化したところを見付ける。	○ まずは、誰が誰のことを思っているかを→で表さず、全員で確認して、その根拠になる文をワークシートに書き込ませる。(一人学び)	・「ハルーン兄さんならたいじょうぶ、きっと夢には勝つてくると、ヤモは確信しています。でも、なんだかむねがいろいろいなくなってしまった。」
○ 最終交代読みをさせる。	・地主「 <u>木かげに入ろうとする。</u> 」→「 <u>わしの門の前でねておる。</u> 」	○ ヤモの兄や父を思う気持ちをそれぞれカードに書き、黒板に貼らせる。	・「ハルーン兄さん、早く帰っておいでよ。」
○ 前時で学習した木かげの位置を確認させる。	・地主「 <u>となりつきました。</u> 」→「 <u>たまたく家の中に入りました。</u> 」	○ 記述が進まない児童には、大まかにつかんだヤモの気持ちを書かせ、その根拠となる文を探すようにさせる。	・「父さんと食べようと思って取ったんだ。」
○ 地主の言動に黄色、百姓の言動に緑色のサイドラインを引かせる。(一人学び)	・百姓「 <u>この木かげもわしのものじゃ。</u> 」→「 <u>本殿はまちがいなくわたしたちが買ったものでございます。</u> 」	○ 家族を思う気持ちの根拠になった叙述を確認させる。	3 黒板に貼ったカードをもとに、ヤモの気持ちを話し合う。
○ 見つけた変化を発表し、話し合わせる。(共学び)	4 2・3・4場面の言動を比べて見付けた地主と百姓の問答の変化した部分を読み合う。	○ ☆(語)ヤモや父さんの家族への愛や村への思いが分かる文を読み取っている。(カード・ワークシート発表)	ヤモ一兄【心配、早く夢中に帰ってきてほしい。】
☆ (語)木かげが徐々に伸びていくことで、地主と百姓の立場が変化してきていることを読み取っている。(ワークシート)	5 地主と百姓の立場の変化についてワークシートに書き、本時の学習のまとめをする。	○ P16の「最後の一文」と対比することになる「ヤモの高橋した気持ち」をとらえさせる。	ヤモ一父【大好き、早くも帰るよ。】
○ 本時の学習内容と感想を当番が報告し、1年生の本時の学習内容についての報告を聞く。	6 1年生とお互いが学習した内容を報告し合い、次時の学習課題をつかむ。	○ 本時の学習内容と感想を当番が報告し、3年生の本時の学習内容についての報告を聞く。	4 ヤモが子羊を連れて帰るときの気持ちをワークシートに書き、本時の学習のまとめをする。
○ 次時は、5・6場面の地主と百姓たちの立場がどのように変わっていくかを読み取っていくことを確認する。		○ 次時は出来事の流れをまとめ、描かれている愛の心について話し合うことを確認する。	・大騒ぎで、とてもつなつたにいます。

(※教師の欄の網かけ部分は、直接指導を示す)

② 学習課題の明確化について

単元の学習計画の段階で、3年生は「民話のポスター作りをしよう。」4年生は、「読書会のポスター作りをしよう。」とした。加えて「それぞれのポスターを活用して紹介し合い、話し合おう。」という最終目標を設定した。そして、最終目標に向けて、各時間の読み取りの課題を設定した。単元を貫く目標に向かってそれぞれの時間が、どのように位置づけられるかを児童に認識させ、見通しをもたせることで、意欲化を図り、一人学びを支えたいと考えた。

3年生は、あらすじや話のおもしろさをポスターで伝える必要があるという視点に立ち、「百姓が仕返しをした」という児童の初発の感想から、立場が逆転する様子を読み取っていくことにした。本時の学習課題を「木かげがのびていくことで、地主とおひゃくしょうたちの言葉や動作がどのように変わっているか調べよう。」と設定した。

4年生の学習課題は、「ヤモの家族や村への思いを読み取ろう。」と設定した。「愛の心」を「相手を思いやる気持ち」と捉え、それが本文にどのように書かれているのかを読み取り、読書会でのテーマとした。計画の段階では、父からヤモへの気持ちにも触れさせようとしていたが、ヤモが家族を思いやる気持ちに絞って読み取ることで、じっくりと叙述に即して読み取る時間を確保することにした。

③ 解決方法の手順について

一人学びの方法として、3年生では言動の変わったところを見付けるために、地主と百姓の言動の部分を色分けをしてラインを引かせ、それをカードに書き出すようにした。前時に、1・2場面の地主と百姓の言動について話し合い、カードを作成、掲示する方法を理解させ、同様の手順で繰り返し、学習を進めた。本時は、それに加えてワークシートに言動の変わったところを記入するように指示した。



【色分けしてラインを引く】

4年生では、登場人物ヤモの気持ちの分かれるところにラインを引かせ、叙述に即してワークシートにヤモの気持ちをまとめさせた。気持ちのみをカードに書かせて黒板に掲示し、それをもとに話し合うようにした。



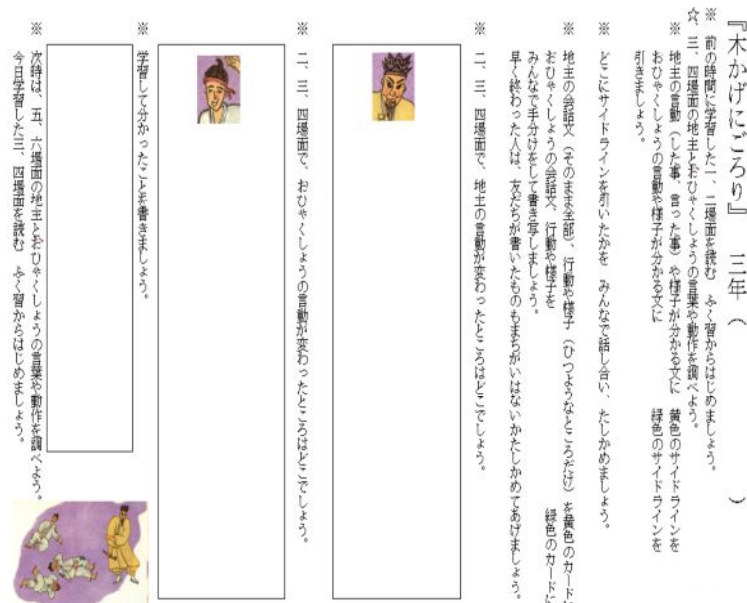
【ワークシートに記入する】

前時には、ヤモの気持ちが分かる文を見付けることができずとまどっていたり、根拠となる文が書けなかったりした児童が、同じようなワークシートを繰り返し使うことで、ラインを引いたり、根拠をはっきりと書いたりすることができるようになった。

④ 教材や教具の工夫について

3・4年ともワークシートに解決の手順を明示し、学習の進め方を示した。話し合いの司会がどの児童でもできるように、輪番制をとっているが、個人差もあり、学習を進める上で難しい面がある。

そこで、個々の児童の実態を考えて、取り組みやすいワークシートにした。全員の手元に学習の流れがあることで、司会になる児童が、それを読みながら学習の流れを全員で確認でき、間接指導の時間に自分たちで学習を進めていくことに役立った。

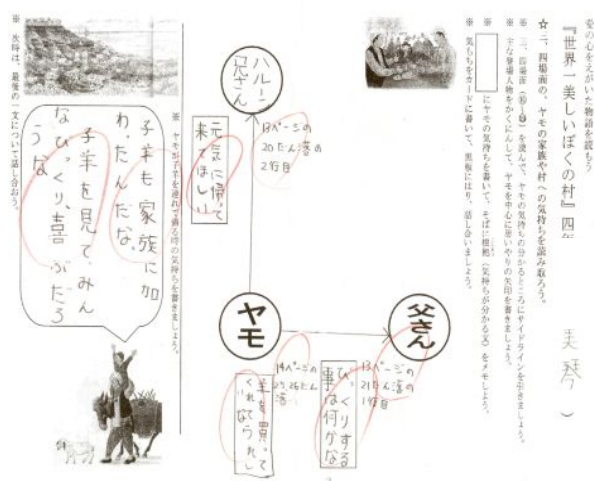


【3年生のワークシート：学習の手順を示す】

また、3年生では、2色の掲示用のカードを用意し、色を変えたことで地主と百姓の区別を付けて変容を読み取ることができた。一人学びでは、ラインを引いた内容を3人ずつのグループで確認し、カードに書く言葉を選択させるようにした。順序を考えて掲示し、さらに前時に掲示したカードと比較したことにより、言動の変化を明確にすることができた。さらに、木かげを示す図を用意し、木かげが伸びていることを確認することもできた。

4年生は、自力で学習に向かうために、ワークシートには登場人物名を入れ、相手を思う気持ちを→（矢印）で表させ、気持ちの方向性を意識付けた。挿絵を取り入れ、どの子どもも学習場面に意識が向くように配慮した。カードに気持ちのみを書かせ、提示することによって、話し合いを焦点化して進めることができた。

さらに、前時までの学習の足跡を掲示しておくようにして、今までの学習の流れを分かりやすく示した。



【4年生のワークシート：根拠を書き込ませる】



【前時の学習の足跡を掲示】

⑤ 表現する場の保障について

一人学びで学習したことを自己表現する場を保障し、友達の考えに関連付けたり比較したりして意見を述べ、話し合うように指導してきた。

一人学びで学習したことを発表する場を設けることで、一人学びの意欲化につながった。また、一人学びで自分の考えを文字に書き出しながら自分の考えをまとめることで、意見発表の自信にもつながった。

⑥ 話し合う力、話す力、聞く力の育成

児童同士の話し合いでは、発表されたことに「分かりました」と反応するだけで、なかなか話し合いが深まらないことがあった。そこで3・4年が合同で行う学習や道徳、朝の会でのフリートークなどの場を捉えて友達の意見につなげて話すように指導してきた。

全教職員で「よい話し方・聞き方」についても検討し、共通理解したものをパンフレットにまとめ、全校で統一して取り組んだ。

よい話し方・聞き方のステップ		
*話し方・聞き方じょうずにステップアップしましょう。		
	話し方	聞き方
ステップ1	☆友達の方を向いて話す。 「はい、～です。」 「はい、～だと思ひます。どうですか。」 ☆理由をつけて話す。 「わたしは～だと思ひます。それは～だからです。みなさんどうですか。」 「同じです。」 「少しちがひます。」 「似ています。」 「付け加えます。」 「質問があります。」 「他にもあります。」 「分かりました。」	○話し手の方を向いて聞く。 ○最後まで話を聞く。 （話のとちゅうで質問などをしない。） ○大事なことを落とさないように聞く。 
ステップ2	☆友達の考えに関連付けて話す。 「わたしは〇〇さんと同じで（ちがって）～だと思ひます。」 「〇〇さんに質問です。どうして～なのですか。」 「〇〇さんに付け加えます。」 ☆順序立てて話す。 「まず」「次に」「そして」 ☆話す事がらがいくつあるかを言う。 「理由は2つあります。」「3つの事を話します。」	○話し手と自分の考えを比べて、似ているところ、ちがうところを見つける。 ○分かったこと、分からなかったことをはっきりさせる。 ○うなずきながら聞く。 
ステップ3	☆事実と感想、意見、伝聞を区別して話す。 「～です。」「～と考えました。」「～だそうです。」 ☆具体的な事実をあげて話す。 「例えば・・・」 ☆目的や場に応じた適切な言葉づかいで話す。	○話し手が何を伝えたいのか考えながら聞く。 ○必要なときにはメモをとりながら聞く。

【学習習慣の約束事をまとめたもの】

⑦ 基礎・基本を身に付けさせるための基盤づくり

前項でも述べたように、全校で統一して取り組む学習習慣の約束をまとめ、他校の実践例等を参考にしながら、パンフレットを作成した。「学習の準備」「学習中の約束」「よい話し方・聞き方」「家庭学習」の項目について作成し、それぞれが定着するように取り組んでいる。分かりやすく示したことで、複式の学級や担任が変わっても、統一した学習習慣が身に付けることができるとともに、保護者への理解も得られやすいと考えている。

学習中の約束

***いすのすわり方**



姿勢は、ピーン
尻からピタッ
机とグー

・姿勢をのびしてあげる。
・机とからだの間を少しはなす。

***本の読み方**



・本は立てて両手で持つ。

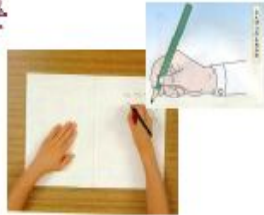
・立って読むときは、いすを後ろに引いて立つ。

***手のあげ方**



・ひじと指先をピーンとのばして、右手をあげる。

***字の書き方**



＜鉛筆を正しく持つ工夫＞

- ① 鉛筆を親指と人差し指でつまむ。
- ② 鉛筆を人差し指につける。
- ③ 鉛筆を中指にもつめる。
- ④ 左手でノートをおさえる。

※ 紙から目まで30cmほどはなす。

***発表のしかた**



・名前を呼ばれたら「はい」と返事をし、いすを後ろに引いて立つ。

・放課の顔を見ながら話す。

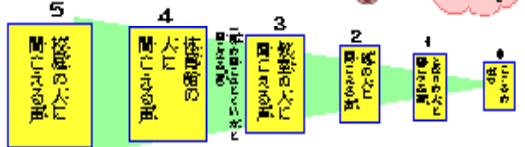
・大事な言葉を、ゆっくり、はっきり話す。

・人音や場所の近くに合わせた声の入さず、話す速さにする。

・話のまとまりごとに、間をとる。

・役や図をかいてわかりやすく説明する。

声ののびかし



5 校庭の空に聞こえる声
4 大に 体中の空気に聞こえる声
3 教室の空気に聞こえる声
2 机の上の空気に聞こえる声
1 手のひらの空気に聞こえる声
0 口の空気に聞こえる声

***話の聞き方**



・相手の方へ顔を向ける。

・自分の言えと比べて同じ言えのときは、うなずきながら聞く。

・大事なことをメモする。

・質問（聞き取れないことやわからないこと）は、話が終わってからする。

【学習中の約束（パンフレット）】

(3) 取組の成果

一人学びとして取り組む学習の仕方をいろいろと体験させ、繰り返すことによって課題解決の手順を身に付けていくことができた。また、学習の手順を明示したワークシートによって一人学びを支えることができた。ワークシートを工夫する際には、学習のねらいをはっきりさせることが大切であり、何を求めてどう書かせるのかという学習の流れを具体的に指示することが大切である。

共学び充実のために話し合いの司会の仕方・深まりのある話し合いの仕方を身に付けさせるように手立てを考え、ペア学習やグループでの意見交換なども取り入れることが必要と考えている。

5 取組の実例Ⅳ

自ら考え進んで学習に取り組む児童の育成（小学校）

課 題	課題解決に向けた取組のキーワード
○一人で学ぶことのできる力を育成することが必要である。 ○学びあい、高め合うことのできる学習活動を展開する。	○「個人内評価」による児童の実態把握と「一人一教室」による個の学びの充実に向けた取組を進める。 ○かかわり合いを条件にした課題を設定する。（算数科における自分の考えを説明する活動の充実）

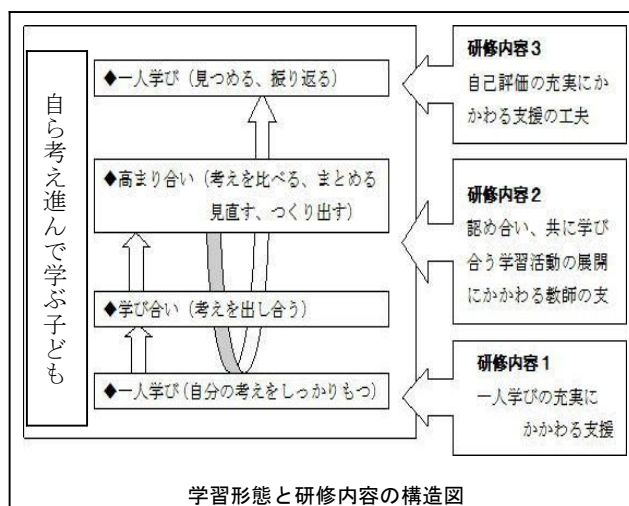
(1) 取組の概要

「自ら考え進んで学習に取り組む児童の育成」をめざし、以下の内容について研修を進めた。

① 一人学びの充実（少人数のよさ）

にかかわる研修

- ア 一人学びの学び方の習得
- イ 「読書のすすめ」の徹底
- ウ 「家庭学習プログラム」の推進
- エ 「生活リズム調査」の分析と望ましい生活習慣づくりにかかわる取組



② 認め合い、共に学び合う学習活動の工夫（少人数での学びを充実させる取組）

- ア 自尊感情を高めるための指導と工夫
- イ 伝えたい思いをもつための体験活動の工夫
- ウ 認め合い、学び合いが生まれる学習形態の工夫と指導

③ 基礎的・基本的な内容の定着

- ア 学びタイム（毎週金曜日5校時）の充実
- イ 中・高学年での国語・算数の学力テストの実施
- ウ 学力向上プランの見直しと個人カルテの作成

④ 視聴覚機器の活用

- マルチメディアボード・ビデオ・デジタルカメラ・パソコン等

⑤ 自己評価活動の充実と指導の工夫（自尊感情を高め豊かな子どもを育む取組）

- 自分の学びを振り返る時間の設定

(2) 実践例

① 学習の流れ

○ 対象学年・教科名・単元名：5年 算数 面積

○ 学習のねらい

ア 平行四辺形や三角形の面積の求め方を理解し、公式を使って面積を求めることができる。

イ いろいろな図形の面積について、既習の面積の求め方をもとに考えたり、活用したりする力を高める。

○ 指導計画（全12時間）

第一次	三角形の面積の求め方を理解する・・・4時間
第二次	平行四辺形の面積の求め方を理解する・・・2時間
第三次	いろいろな図形の面積の求め方を考える・・・4時間（本時 2/4）
第四次	いろいろな面積の問題を考える・・・2時間

○ 単元の評価基準

関心・意欲・態度	数学的な考え方	表現・処理	知識・理解
既習の面積公式をもとに三角形や平行四辺形の面積を求める式を進んで見出そうとする。	既習の面積公式をもとに三角形、平行四辺形の面積を工夫して求め、公式を作ることができる。	三角形、平行四辺形の面積を求める公式を用いて面積を求めることができる。	三角形、平行四辺形の面積の求め方を理解する。

② 一人学び・共学びの充実に向けての工夫

ア 個人内評価を取り入れた一人ひとりに対する細やかな指導の充実

○ 一人ひとりの学習状況を把握し、以下のように個人内評価を設定して一人ひとりの学びが充実するよう支援した。

児童名	本時までの様子	図形 感覚	図形 面積	平行 垂直	本時の個人内評価 [※] の視点 [※]	本時の様子
※	・計算が苦手で難しい課題になると抵抗を示したり問題の意味が理解できなかったりすることがある。	◎	△	○	自分が一番やりやすい方法で、必要な長さを求め、台形の面積を正確に求めることができる。	
A	・直感的に物事を考え、図形的な感覚があり図形をしきつめる活動は得意である。					
※	・理解力・計算力に優れ、自主的に学習に取り組み予習もしている。	※	※	※	適切に図形を回転させ、つなぎ合わせて、台形の面積を求める式を公式を使わずに	
B	・課題を解決するために図形をどのように変化させたり、どんな補助	△	◎	◎		

【本時（第三次 2/4 時分までの個人内評価）】

イ 一人一教室で一人学びの支援（一人学びの充実の工夫）

○ 三角形や平行四辺形の面積の公式など既習の学習を生かして、台形の面積の求め方を一人ひとりが追究する活動では、一人ひとりがしっかりとした考

えをもつことができるように、「一人一教室」での学びの時間を設定した。

- 一人一教室での個々の学びを充実させるために、次の二つの手だてを行った。

【手だて1・・・大きな台形模型の準備】

- ・ 児童が切ったりつなぎ合わせたり具体的な操作活動を通して考えることができるように、大きな台形模型を準備した。その際、児童の実態に応じて支援することができるように、補助線入りの模型や底辺・高さを確認する補助線などが入ったものも準備した。児童は、図形を操作しながら面積を考えることができるとともに、教師にとっても、子どもたちの思考過程を机間巡視の際に見取りやすいといったメリットがあった。

【手だて2・・・学習プリントの工夫】

- ・ 一人学びで、自分の考えを書くだけではなく、共学びの際に、自分の考えをわかりやすく発表することができるようにするために、台形の図形入りのワークシートを用意した。これによって、ワークシートの流れに沿って発表することができ、発表を苦手としている児童にとっても安心して自信をもって発表することができた。

- 一人一教室で一人学びを行ったことにより、児童は、集中してじっくりと学習課題に取り組むことができた。また、課題に直面しても、すぐに友達や教師に頼るのではなく、学習の主体者として、学ぶことに対する関心や責任感をもって学習を進めることができた。また、教師は、教具や学習プリントに一工夫することで、一人ひとりの思考過程をしっかり把握した上で、指導していくことができた。

ウ 互いの考えを理解し合い、共に学び合う場の工夫

- 理解し合い、学び合いの場が活性化するための工夫として、図の説明の後、立式による交流の場を設定した。

- 児童は、自分の考えた立式を発表するのではなく、自分の説明を聞いて友達に立式してもらおうようにした。この学習活動を組むことにより、自分の説明が友達にどのように伝わったかについて児童が自己評価しやすいといったメリットがあった。また、言語と数式という異なるコミュニケーションツールを使



一人一教室で集中して取組む



個々に対するきめ細かな支援



共に学び合う場の工夫

って交流の場を仕組むことで、より友達に自分の考えを分かりやすく伝えることができ、それとともに、友達の発表もしっかり聞き取りたいという意欲が表れてきた。さらに、立式したものを一般化していく過程で、数学的な用語や公式のよさや便利さに気づくこともできた。

(3) 取組の成果

一人学び・共学びの充実に向けて、三つの取組を進めたが、今後も子どもたちが自信をもって自分の考えを発表できるように指導を続けていきたい。また、どの視点についても学年や教科によってよりよい指導方法の工夫改善を進め、さらに一人学び・共学びの充実に向けての研修を追究していくことが大切だと考えている。

6 取組を振り返る

明るさ、素直さ、旺盛な好奇心、物事に取り組む時の真剣なまなざしなど、そうした子どもたちの姿にふれたとき、子どものもっている力や魅力を引き出し、伸ばすことの大切さを改めて感じる。豊かな自然環境に恵まれ、人と人とのつながりが比較的強い環境の中にある小規模校において、こうした姿に出会う場面は多い。

しかし、学習集団が少人数であるがゆえに、他者に対しての見方が固定化し、学び合いの場において発想に広がりや深まりが欠けたり、特定の個人の意見に流され、自信をもって自分の考えを主張することが難しかったりすることは少なくない。子どもたちが、元来もっている魅力を最大限に発揮し、それらを個々のよさとして高めていくことや、いかなる環境の中にあっても、自分を見失うことなく、力強く生き抜く力の基盤を創りあげていくことが、重要であると考えます。

そのためには、きめ細かな配慮のもと、一人学びを充実させることで、自分の思いを大切にし、しっかりとした自分の考えへと高めていくことや、個々の考えを互いに認め合えるような共学びを充実させることで、自尊感情を高めていくことが望まれる。

複式指導における人間関係は、学級集団、学習集団の基盤をなすものであり、学び方の習得は、間接指導時の一人学びや共学びを成立させるために必要な力であり、さらにリーダー学習やガイド学習は、そういった力をさらに高め、学習を充実させるための手だてとして必要と考える。

また、県内の大規模校においても学習集団としての基盤を重視した、授業中のルールづくりを進め、一人学びを取り入れている学校や、他県の学校においては、少人数指導を充実させるために学級を分割し、「わたり」のある指導を進めている学校もある。子どもたちの実態を的確に捉え、必要な力を必要な手だてで伸ばしていくことが望まれる。

Ⅱ－３ 表現力・思考力の育成に向けて

１ 取組のねらい

少人数の授業では、学び合いを大切にする仲間づくりを大切にしている。自分を表現することが積極的にできる学習集団にしていくことで、友達の学びのよさ、友達との学び合いの楽しさやすばらしさを感じさせることにもつなげたい。

そして、もっと自分らしく、もっと豊かに表現する力を育み、子どもたちの内なる能力を引き出したい。そのためにも子どもたちの思いを高め、その思いを伝えようと、一生懸命にさせることが大切になる。子どもたちは、仲間と対話したり討論したりする中で、より深まりと広がりのある考えにたどり着いた時、相手を説得しようと努める姿や同時に相手の意見に納得する姿が現れる。このような姿が見られた時、子どもたちに表現力や思考力が身に付いたと判断できる。

様々な課題に対して前向きに考え、解決しようとすることができ、人前で自分の思いや考えを堂々と表現できるように子どもたちを育てるとともに、協調性や主体性のある学習集団づくりをめざした。

２ 取組の実例

仲間と共に考えたくなる授業づくりを通して（小学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○少人数での学び合いを充実させるために、自己表現ができたり、自分で問題を解決する力を身に付けたりする必要がある。 ○学校から社会へと生活基盤を広げていく際に、人とかかわり合う力として、精神的なたくましさを身に付けておく必要がある。 ○少人数の学習集団として、温かな人間関係のすばらしさを味わわせておく必要がある。	○思いを伝え、受け止める力を育成するために、低・中・高学年ごとに目標を立て、授業づくりを進める。 ・低学年では「聴く」 ・中学年では「問いをもつ」 ・高学年では「自分の考えを主張し、学び合う」 ○仲間と共に意欲的に考える学習活動を積極的に授業に取り入れる。

(1) 実践例

① 低学年部会(単式学級)

ア 低学年部会の取組の視点

子どもが聴き合う場を大切にした授業づくりの工夫

- 学習の中における「聴き合う場」の設定
- 教師の指導場面の工夫
- 学年に合った聴き合いの学習規律づくり

イ 「算数科 2年 九九のひょう」の実践

“人の話を受け止めて聴くこと”ができるためには、授業中の一人ひとりの思いや考えと学習内容の定着を意識した授業を進める必要がある。

そこで、授業中の一人ひとりの思いや考えを大切にするために、子どもの「つぶやき」に着目し、授業構想し、指導した。指導の際の留意点として、考えを交流する場面で、自分と異なる考えを積極的に取り上げ、説明させた。これにより、「そうか!」「えっ?」「やっぱり!」といったつぶやきがたくさん生まれ、自分とは違う考え方にも気付き、一人ひとりの理解を深めることができた。さらに、このつぶやきを大切にするにより、聴く意識も高まった。



自分とは異なる友達の解き方を説明するための手順等を考えている



友達の前で、異なる考え方を発表する

ウ 取組の成果

- ・意図的に自分とは違う意見をもった人の考え方を説明し合うことで、互いの意見を尊重し合い、友達の考えを聴き合う姿勢が育つことが分かった。授業の中に「聴きたくなる」仕掛けが必要であり、そのためにも子どもたちの実態に応じた課題づくりを工夫することの大切さを実感した。
- ・低学年では、学習に最小限必要な学習用具しか机の上に出さないといった「聴く」ための机上の環境づくりも大切である。
- ・話し合いの際に「こんなことばを使って話すといいね。」と、子どもたちの発言の中から出てきたことばをカードに書き集め、日々の授業で用いるとよい言語環境づくりに努めた。これにより、相手の話に耳を傾け、自分の思いを伝えようとする意識が育ってきた。

② 中学年部会（複式学級）

ア 中学年部会の視点

子どもの問いを大切にした授業づくりの工夫

○ 課題提示の工夫

- ・単元全体を見通し、詳しく知りたいことや不思議なことなどの問いを、分類して共通の課題にする。
- ・活動や観察の中から「不思議」に思ったことを取り上げ、追究する課題とする。
- ・子どもたちにとって意外性のある教材との出合わせ方、投げかけ方や問い返し方などを工夫する。

○ 思考の深め方の工夫

- ・課題に対する答えを羅列するのではなく、「その中でどれがよりよい考えなのか」を考えさせる。
- ・友達の考え方や見方の共通点や相違点を見つけさせ、比べることで、一人ひとりの表現の仕方を学び取らせたり、新たな課題を見つけさせたりする。
- ・授業中の子どものつぶやきに耳を傾け、大切なつぶやきを課題として取り上げる。
- ・学習を振り返り時間を設け、学習課題に対する自分の考えを明確にしたり、新たな疑問がないかを考えさせたりする。
- ・「書く」活動によって自分の考えをもつことを習慣化し、それをもとに話し合いができるようにする。

イ 「国語科 4年 調べたことを知らせよう」の実践

子どもたちが、互いの考えを分類・取捨選択等をしながら主体的に学習計画を立てる工夫として「付箋」を利用した。

「付箋」を使ったことで、発言することに自信がない場合でも、よい意見に対して評価ができ、お互いの意見交換のきっかけにもなった。



話し合いをもとに分類・取捨選択した
中から、グループの考えを決める様子



グループで調べた内容が全体に示され
たときの様子

ウ 取組の成果

- ・ 間接指導の際には、音声言語だけでなく、子どもたちの考えを付箋や短冊カードなどに書いて表現し合うことで、互いの思いや考えをよりよく理解し、主体的に学び合えることが分かった。教師にとっても子どもの思考過程を把握しやすかった。
- ・ 単元全体を見通した学習課題をみんなで作り、学習計画を立てることができるようになってきた。また、それに沿って自分たちで学習の流れを作り、取り組むことが少しずつできるようになってきた。

③ 高学年部会（単式学級）

ア 高学年の視点

自分の考えをもち、子ども同士が意欲的に学び合う授業づくりの工夫

- 授業の導入時における資料や課題提示の工夫
- 自分の考えをじっくり書く場の設定
 - ・ 考えをまとめやすくするために書く観点を提示する。
 - ・ 内容によっては、書く活動の途中に友達の考えを紹介したり相談したりする時間をもつ。
 - ・ 相手の意見を聞いて、さらに自分の意見を書かせて話し合いをする。
- 学び合いにつながる発表、話し合いの場の工夫
 - ・ 「一人学び」→「グループ学習」→「全員学習」というような順に考えを広めていく。
 - ・ 質疑応答をし、意見をつなげる。

イ 取組の実例（社会科 6年 3人の武将と全国統一）

学習の中で、自分の思いや考えを書くこと、情報を共有化するために仲間と対話すること、課題を深め解決していくために仲間と討論をする時間の確保等を課題として設けた。



討論の後、再度課題について自分の考えをまとめている様子



グループの主張を黒板に書く様子



自分たちの考えを出し合い整理する様子

ウ 取組の成果

- ・より深まりのある「討論」にするために、子どもたちの情報を共有するための対話や意見交換が重要であることが分かった。
- ・相手を意識して分かりやすく説明することはまだ十分ではないが、自分の考えや感想はしっかり書けるようになり、人の意見につなげて、自分の意見も言えるようになった。

3 取組を振り返る

小規模校では、上・下学年の子どもが仲良く遊んだり、上学年の子どもが思いやりをもって自然に下学年の子どもに接したりする姿が頻繁に見られる。一方で、少人数であるが故の人間関係の固定化などにより、子ども同士のコミュニケーション力の育成に課題があるとも言える。

子どもたちの将来に思いを馳せたとき、子どもたちなりの夢をもち、精一杯たくましく生活する力を身に付けてほしいと願う。

子どもたちは、近い将来、学校から社会へと生活の基盤を移していく。これは、人との様々なかかわりの中で生活する機会が増えることを意味する。このかかわりの中で主体的・創造的に生きていくためには、自分を発揮することが求められる。保護者や地域の方は、子どもたちが丁寧な教育を受けることができ、微笑ましいと思う反面、不安な面も抱えている。

少人数であっても、「友達と学ぶ」、「友達から学ぶ」など、温かな人間関係の中での学びを通して、自分なりの見方や考え方をもつことは重要である。そして、それらの見方や考え方は、学び合いによって、より客観性のある子どもの見方や考え方にもなっていく。

教師主導の授業から「子ども自らが考えをつくる授業」への転換を図っていく必要性を感じるとともに、「子どもたちが考えたくなる授業づくり」を通して自分の思いや考えを自分らしく表現できるたくましい子どもを育てていきたいものである。

Ⅱ－４ 校内研修の活性化に向けて

１ 取組のねらい

へき地・複式・小規模校において、校内研修は大きな意味がある。それは、子どもたちと教員の関係が緊密であるため、子どもの実態がよく分かり、対応も早くでき、短期的に取組の成果を期待できるからである。

そのように考えると、校内研修のためのテーマは、子どもの実態に対応するものであることはもちろん、研修を組織する教員の専門性を生かす内容であることなど、学校の実情を考え、総合的に進めていくことが望まれる。

また、研修の進め方については、K J 法を用いて職員間の関係づくりを進め、共通理解や共同実践を行う基盤を確立したり、P D C A サイクル等を用いて、計画的に取り組んだりするなど、目標の意識化と実践力が大切になる。そして、最終的には、子どもたちの成長の姿をもとに取組を検証することである。

小規模校ならではの機動力を生かし、研修を充実させれば、子どもたちの活気も生まれ、学校の活気にもつながるであろう。

２ 取組の実例Ⅰ

学ぶ意欲を高めるための共通理解と共同実践（中学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○主体的に学ぶ児童生徒を育成することが必要である。 ○基礎学力の定着と向上に向けた授業づくりが必要である。	○小中併設の学校の特色を生かす。 ○研究の視点を明確化し、授業で実践する。 ・学習過程の工夫 ・評価活動の工夫 ・学習習慣の確立

（１）取組の概要

小学校・中学校併設の利点を生かし、互いに校種の異なる学校への理解を深めながら、小・中学校の教職員が子どもたちの成長をともに見つめ、研究に取り組んでいる。年度末には、１年間の研修のまとめと次年度に向けての構想を協議し、次年度の研修の方向性を定めている。

○ 研究主題：「自ら考え自ら表現し学び合う児童生徒の育成」

主体的に学ぶ児童生徒を育成したいという思いから、児童生徒が課題に対して自ら意欲的に取り組むことができれば、学びを継続させていくことができ、将来の自分自身の生き方についても見通しをもつことができると思った。

そのためには、学びの根幹となる「学ぶ意欲」と、学びの土台となる「基礎学力」を高めることが必要であると考えた。その二つを同時に高めていくことを通して、「学びの成就感」を得られるような授業を追究することとし、主題解明の仮説を「児童生徒の実態を把握し、『学びの成就感』を得られるような授業を展開していくことによって、一人ひとりの学ぶ意欲が高まるとともに、基礎学力も身につけていくだろう。」とした。

(2) 研究の視点

- ① 学習過程の工夫（個や集団に応じた指導、教材・教具の開発、発問の工夫）
- ② 評価活動の工夫（評価規準の明確化、自己・相互評価の場の設定）
- ③ 学習習慣の確立（学習規律、学ぶ姿勢、家庭学習）

(3) 実践例

① 学習過程の工夫

基礎学力の定着が学習意欲の向上につながると考え、数学科と英語科において個別指導の充実を図った。まず、学力チェックテストを行い、どの分野・どの単元の学習を補えばよいかを把握した。そして、学年の枠をとり習熟度別グループをつくり、個に応じた課題学習の充実を図った。

また、児童生徒の学習意欲を高められるような教材・教具の開発に努めた。例えばクイズ形式での導入、視聴覚教材の効果的な活用などである。



【英語科での個別指導】

② 評価活動の工夫

教師がよりよい授業づくりをめざすには、授業に対する児童生徒の率直な意見を積極的に取り入れていく必要がある。そこで、授業評価シートを作成し、児童生徒による授業評価を毎時間行い、授業改善に努めている。さらに、月一回の参観授業において、保護者対象の授業評価を行っている。教師の働きかけや児童生徒の活動状況についての客観的な評価を授業改善に取り入れている。

平成20年度 情島小中学校授業参観・懇談会(1月)				
平成21年1月19日(月)				
1 参観授業の内容と感想				
小・中2年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
小・中3年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
小・中4年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
小・中5年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
小・中6年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中1年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中2年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中3年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中4年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中5年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
中6年生	国語「旅のついで」	旅のついで	旅のついで	
2 小・中3年生・参観会(15:00~16:00、小・中3年生・参観会)				
○ 授業参観あり				
○ 参観授業の感想記入(123年度参観会について)				
○ 参観授業の感想記入				
○ 参観授業の感想記入				
3 授業アンケート				
①子どもたちは、参観会に参加していましたか?	A	B	C	D
②授業は、楽しく参観できましたか?	A	B	C	D
③子どもたちが成長しているのが見られましたか?	A	B	C	D
④参観は、子どもたち一人ひとりに対して、授業を工夫していましたか?	A	B	C	D
4 授業参観会の感想				

※参観会終了後、担任に渡してください。ご協力ありがとうございます。

【授業評価シートの例】

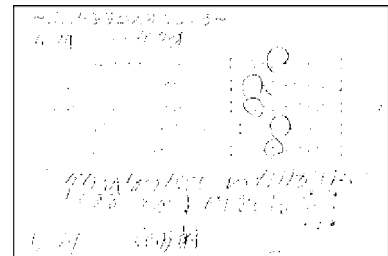
児童生徒の学びに対する自己・相互評価の場の設定も工夫した。例えば、単元ごとにシラバスを作成して評価規準を明確化し、学習内容の見通しをもたせるとともに、その達成度について自己評価を行わせ、学習のアドバイスを与えた。また、作品の製作の学習では、その過程で付箋を用いて互いに評価し合う活動を仕組み、他者の評価やアドバイスを参考にし、作品の質を高めることができた。

ふりかえりカード (6月19日) 内容 ① 4月

はい いいえ

- 今日の学習はよくわかりましたか。
- 今日の学習はおもしろかったですか。
- 進んで発表しましたか。
- 先生や友達の方を聞いて、発表しただけで満足しましたか。
- 先生の教え方はわかりやすかったですか。

コメント
今日は小数のわり算で、うまにできた。わり算では、小数点を真上につけるのですね。そこに負けないように、とても素晴らしいです。



【ふりかえりカードの例】

③ 学習習慣の確立

学級担任や教科担当による学習相談をもとに、児童生徒に個別の学習課題を与え、家庭学習に取り組ませた。さらに、学活や道德の時間において将来の生き方について考える場を設定し、児童生徒が学ぶ目的を見出し、自ら進んで学ぼうとする姿勢を育てることとした。

④ 授業における取組の様子

- ア 単元名 提案の仕方を工夫しようープレゼンテーションー
- イ 単元のねらい

本単元では、「伝え合う力」を高めるとともに、「思考力」や「想像力」を養い、言語感覚を豊かにしていくことをめざしている。つまり、表現力と理解力とを基盤に、人と人との関係において、互いの立場や考えを尊重しながら、言葉によって相互伝達、相互理解を進めていく力としての「伝え合う力」を育成しているのである。「話すこと・聞くこと」において、テーマにかかわる調査活動では「相手の立場や考えを尊重し、相手の意図することを理解する能力」、発表では「相手に分かりやすい表現で発表する力や、他グループの発表をしっかり聞いて内容を理解する能力」を身に付けさせることをねらいとしている。

- ウ 生徒の実態と身に付けさせたい力

【全学年共通課題】基礎的な言語力、人間関係を構築しようとする意欲。

【1学年】自分の考えを具体的に分かりやすく伝えるための語彙力。

【2学年】物のとらえ方は人それぞれ異なることを理解し、他者の意見を自分の考えに活かす力。

【3学年】話の要点を見つけながら他者の考えを集中して聞き、その聞き取った内容を分かりやすく発表する力。

エ 授業づくりの工夫点

○ 全学年合同授業の実施

普段の授業では人数の都合でつくることのできない複数の班をつくり、学習を進める中で互いが切磋琢磨できるような雰囲気をつくる。また、全教員が各班の担当となり、個別指導の充実を図る。

○ グループ学習のねらい

一人ひとりが意見をもち、グループの中で人に分かるように発表すること、人の意見に対して素直に耳を傾け、認め、自分の意見にどのように反映していくかを考えさせる。

○ プレゼンテーションのテーマ「方言」の設定

日常何気なく使用している言葉を改めて見直すことで生活を豊かにするとともに、方言のすばらしさに気付かせる。

○ 地域への聞き取り調査の実施

説得力のあるプレゼンテーションをつくらせるとともに、交流の場において新たな人間関係を築いていこうとする意欲をもたせる。



【調査活動のようす】

<参考> 指導計画（総時数 7 時間）

	学習内容	自己教育力育成の手立て〔評価☆〕
一次 (2)	○「言葉と人間のかかわり」に関する文章を読み、筆者の考えに対する自分の考えを書かせる。	・教科書で擬音語・擬態語の確認をした後、他にもないか考える。（ワークシート） ・言葉は発する人間そのものを表すことを考えさせる。（ワークシート） ☆普段使っている擬音語・擬態語を思い出すことができる。（ワークシート） ☆筆者の考えを基に感想を書くことができる。
二次 (3)	○説得力のあるプレゼンテーションをするための、効果的な表現の方法を工夫させる。	・テーマを決め、何を調べるのか見通しをもつ。 ・どのように調べるのか方法を考える。 ・調べるに当たって、班で協力する。 ・調べた内容を的確な方法でまとめる。 ☆何をどのように調べるか、計画を立てることができる。（ワークシート） ☆計画に基づいて班で協力することができる。（発表）
三次 (2)	○プレゼンテーションを行い互いに評価させる。	・調べた内容について班で発表する。 ・必要に応じて、適切な資料の示唆や助言を行う。 ☆調べた内容で適切な資料を作成し、教員や友達の意見を参考にしながら、発表原稿を組み立てることができる。（発表）

※ 調査活動は総合的な学習の時間に実施する。（計 3 時間）

⑤ 考察

全体を通して、生徒一人ひとりがもっている力を発揮しながら、グループで協力して学習を進めていくことができた。プレゼンテーションでは、劇・クイズ・ポスターセッション等、グループごとに発表形態が工夫されており、発表中の役割分担もきちんとできていた。発表を無事終え、生徒は学びの成就感を感じることができた。



【プレゼンテーション】

評価活動では、ワークシートへの記入に加え、プレゼンテーションのビデオ視聴も行い、より客観的に自己評価を行うことができた。しかし、他者評価では、声の大きさや姿勢といった表現に関する指摘が多く、発表の内容や形態をふまえた感想を書ける生徒は少数であった。また、調査活動は、初めは緊張して地域の方に声をかけるのをためらう様子もあったが、回を重ねるごとに慣れ、原稿に頼らず自分の言葉で説明できるようになった。

2 取組の実例Ⅱ

学習意欲の向上をめざす「共に学ぶ集団」の育成に向けて（中学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○人間関係の固定化やよい意味での競争心のなさが学力向上の妨げになっている。 ○子ども同士の関係をよりよくするには、小中の連携が必要である。	○A F P Yを通した仲間づくりを研修し、実践する。 ○小中連携の情報交換会で、身に付けさせたい「学習のきまり」に関する目標をつくり、実践する。 ○小中学校相互乗り入れ授業と相互授業参観に取り組む。

(1) 取組の概要

数年来、授業研究を中心として、意欲を高める活動の工夫や向上につながる評価・指導のあり方について研究を深めてきた。また、各教科で工夫して、基礎的・基本的な学力の定着及び思考力・表現力の向上のための取組を行ってきた。具体的には、授業に臨む態度や学習用具等の準備及び家庭での学習などにおいて、

望ましい学習習慣の定着を図ることや、授業を中心に学習形態の工夫や発表活動を通して、思考力・表現力を高める支援を重ねていくことなどである。また、小学校との連携も強化し、一貫した指導も進めた。

これまでの研修で明らかになってきたことは、学習の場での消極性が、基礎的・基本的な学力の不足による自信のなさ、小学校から固定化された少人数の学級で過ごしてきた人間関係のなかで、生徒が自由に思いを表現することが困難な環境が生じているということであった。

そこで、従来の取組に加えて、学習意欲の向上の妨げになっている生徒間の人間関係の改善に努めることをテーマとした。「平成20年度人間関係づくり実践プロジェクト」推進校となり、人間関係づくりの手法についての専門的な支援が受けられることを契機に、共に学ぶ集団づくりを進めることによって、自己実現をめざして学習に取り組む意欲や、主体的に学ぶ姿勢の育成に迫りたいと考えた。

- 研究主題：意欲をもって課題を追究し、主体的に学ぶ生徒の育成
～基礎的・基本的な学力を育む工夫と共に学ぶ集団の育成をめざして～
- 研究仮説：① 基礎的・基本的な学力を身につけさせることができれば、生徒は自分に自信をもち、課題を追究する意欲が高まるであろう。
② 思考力・表現力を高める具体的な支援をすれば、学ぶ手段がわかり、主体的に学ぶことができるであろう。
③ 望ましい学習習慣が定着し、集団に共に学ぶ雰囲気が高まれば、①②の仮説において、取組の効果が高まるであろう。

(2) 研究の視点

- ① 基礎的・基本的事項の定着をはかる指導の工夫がなされているか。
- ② 思考力・表現力を高めるための具体的な工夫がなされているか。
- ③ 共に学ぶ集団づくりのための支援が行われているか。
- ④ 望ましい学習習慣の定着に向けた支援が行われているか。

(3) 研究の内容

① 授業研究の推進【指導技術の向上と学力の定着】

全教職員による授業研究を実施し、指導技術の向上に努める。今年度は、共に学ぶ集団の育成をめざして、AFPYを取り入れた学級活動の授業研究会を実施した。

授業提供では、各授業者が授業の中で最も注目してほしい工夫点を記入して配布し、検討会では工夫点を中心に話し合うなど、検討会を有意義にするための工夫を重ねた。

<参考> 平成20年度の授業研究会の流れ

学期	月	研修会名	研修内容
1学期		市教委計画訪問	全教諭の授業と研修職員会
	7	小中交流授業研究会	第1回ブロック交流授業研究会 (小学校6年生・社会の授業提供による小中合同の研究会。指導者を招聘する。)
2学期	9	第1回校内授業研究会	2年生理科授業提供と授業検討会 (生徒間の教え合いを通して、基礎的・基本的事項の定着を図る。)
	9	第2回校内授業研究会	1年生社会科授業提供と授業検討会 (学習プリントの答え合わせを他生徒との考え方や意見の交換の場とする。)
	11	小中交流授業研究会	第2回ブロック交流授業研究会 (3年生学級活動「AFPYを通した仲間づくり」授業提供と小中合同の研究会。指導者を迎え、AFPYについて研修する。)
	12	第3回校内授業研究会	1年生道徳授業提供と授業検討会 (お互いの意見をしっかり聞くことにより、自分の考えを深める。)
3学期	予定	第4回校内授業研究会	2年生学級活動 (AFPYを通した仲間づくりについて実施予定。指導者を招聘する。)
	予定	第5回校内授業研究会	1年生国語で実施

② 研究の視点に基づく、具体的な支援の工夫

【基礎的・基本的事項の定着を図る指導の工夫】

- ・基礎学習事項や計算の小テストを行い、復習する。(社会・数学・理科等)
- ・単元末の振り返りにより、学習事項がどの程度定着しているかを把握し、補充学習を行う。(英語等)

【思考力・表現力を高めるための具体的な工夫】

- ・作業やグループ学習を多く取り入れ、思考力や表現力を育てる。(数学等)
- ・授業の中に、意見交換・自分の考えを深める場を多く設定する。(社会等)

③ 共に学ぶ集団の育成をめざした実践【人間関係づくり実践プロジェクト】

生徒同士が固定化した人間関係を見直し、お互いの行動を肯定的に認め合う雰囲気をつくることをねらいとし、学級担任がAFPYを実践できるようプロジェクトの計画にもとづいて3回の校内研修会を実施した。研修会では、様々なアクティビティを紹介していただき、授業にどのように取り入れるか、どのように振りかえるかまで具体的に学ぶことができた。

11月の小中合同授業研究会が授業として初めての実践となったが、生徒の心に残る体験となった。また、小学校の先生方からも高い関心が寄せられ、小中合同の検討会では積極的な意見交換が行われた。今後は、より多くの日常的な実践を行うことが課題である。

④ 小中連携教育の推進【きめ細やかな指導・支援等の充実】

・共通の研究主題『学ぶ力を高める学習活動の創造』で小中交流授業研究会を年2回実施することによって、指導力の向上を図った。総会や研修会後には情報交換会をもち、児童・生徒の理解に努めた。今年度は、「授業の開始時間」「忘れ物の届け出」など小中共通で身に付けさせたい学習のきまりは何かを話し合い、発達段階に応じて取り組むこととした。



小中交流授業研究会の授業提供の様子

・小・中学校相互の乗り入れ授業も実施した。昨年度は小学校の先生が中学1年生に国語を、中学校からは小学校6年生に理科の授業を行った。今年度は小学校から中学1年生に国語を、中学校からは6年生に英語活動の授業を乗り入れ授業で実施した。これにより教員は他校種の指導方法から多くのことを学ぶことができた。また、6年生の児童は進学後の不安が和らぎ、中学校での学習に期待をもつという成果が期待できる。3学期には、平成18年度から実施している小学校6年生を対象とした授業体験を行うことにしている。

・校内授業研究会の日程を明確に位置づけ、小学校と中学校間で可能な限り相互の授業を参観し合うことにより、学習内容や児童生徒の実態の理解につながるだけでなく、指導力向上の面で校内が活性化し、大きな成果も得られた。

3 取組を振り返る

小規模校では、必然的に教師も子どもも一人ひとりの役割が大きくなる。だからこそ一人ひとりのかかわり合いが学習活動を支える。小規模校で子どもたちの固定化した人間関係を改善する必要があるとよく聞くが、これがその例のひとつである。

校内研修を活性化させることが、子どもたちの日々の生活の活性化につながることは言うまでもないが、教員同士のよい関係のもとに、共同実践を進めていくことが何よりも大切であろう。よい関係とは、お互いの甘えを許すものではなく、研究に対する情熱を共有し合い、自分の考えを主張し合い、認めあえる関係のことだと考える。研究の視点を明確にして授業研究をすることや子どもたちのよりよい関係づくりへの強い願いなど、課題意識を明確に共通に認識できれば、目的達成に向けた取組は、自然と教員の間をよいものにしていくであろう。

また、少ない人数の中での研究は、一人ひとりの負担も多いため、外部からの講師の招聘は効果的であり、さらに新しい視点で研究をとらえ直すよい機会にもなる。校内研修の活性化により、より充実したへき地・複式・小規模校教育を進めたいものである。

Ⅲ 豊かな心を育むための学習環境の充実

1 交流学习による社会性の育成に向けて

2 小中連携教育の効果的な取組に向けて

Ⅲ－１ 交流学习による社会性の育成に向けて

１ 取組のねらい

小規模校の学校では、一人ひとりの絆を強め、生活集団、学習集団としての力を高めている学校が多いが、他の集団の中で、そういった力が発揮できるかという点、なかなか難しいことが多い。

そこで、多くの学校は、交流学习により子どもたちに異なる環境の中で自分を表現することや、自分を試してみることに挑戦させている。子どもたちにとっての交流学习の経験は、自校に戻ってからの自分磨きのひとつのきっかけをつくり、次の交流学习時の目標をつくる上でも効果的であるとともに、相手とのかかわり合いを意識させるよい機会にもなる。

交流学习の効果は様々であるが、子どもたちには、自分を発揮したいと思う気持ちを育み、自分を受け入れてもらえるようにしていく積極性を身に付けさせたい。教師は、回数やねらい等を工夫し、子どもを成長させる交流学习を計画的に企画したい。

２ 取組の実例

継続的な交流学习による教育効果（小学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○社会性を育むために、同年齢の友達や異年齢の人たちと学び合い、かかわり合う機会が必要である。 ○多様な経験を通して味わうことのできる自己有用感や自信が必要である。	○生活経験や社会環境の異なる友達や地域の方との学習により、社会性を身に付ける。 ○地域の特色を学び合うことで豊かな心を育む。

(1) 取組の概要

- 海沿いの学校と山間部の学校など、生活環境や学習環境の異なる友達同士の多様なものの見方や考え方、また人間性に触れることにより、豊かな社会性を身に付けさせることをねらいとする。

(2) 実践例 1 《3校合同交流干潟観察会》

① 交流干潟観察会のねらいと内容

- 交流学习による干潟観察会を、年に2回（春と秋）実施し、交流学习後は、交流学习の感想や手紙を互いに交換する。
- 干潟の生き物を探したり調べたりすることにより、干潟の生き物について興味や関心を高めるとともに、ふるさとの自然環境を大切にする心を育てる。
- 3校の児童が共に学習活動を行うことにより、多様なものの考え方や見方を養う。また、互いの人間性に触れることにより、豊かな社会性を養う。

② 高齢者及び知的障害者福祉施設での交流のねらいと内容

- 年間2回、「ふれ合い交流会」、「合同運動会」を実施する。
- 高齢者や障害者の方々とのふれ合いを通して、思いやりの心を育み、相手の立場に立って接したり、支え合いや助け合いの大切さと喜びを体験したりする。

③ 教科による交流学习

干潟観察会を前に、3校の児童が低学年・中学年・高学年の3グループに分かれて、教科及び道德による交流学习を行った。教科等による交流学习を行うことにより、自校の友達とは違ったものの見方や考え方に触れることができ、学習に対する意識を高めることができた。特に、発表時の表現力の違いに互いの関心が向いていた。また、他校の友達と学習する喜びを味わうこともできた。



教科による交流学习（高学年）

④ 干潟観察会事前授業（波の実験）

干潟での観察を前に、当日の指導者による「波の実験」の学習に取り組んだ。「波の反射」、「砂浜と波の関係」、「消波ブロックと波の関係」等について、実験器具を用いて興味深く学び取ることができた。特に、消波ブロックの働きについては、子どもたちは予想以上の効果に驚きをもって実験を繰り返していた。



指導者による「波の実験」授業

⑤ 湾での干潟観察

潮の引いた時間に湾の干潟に出かけ、干潟に生息する生き物の観察と採取を行った。特に、山間部の小学校の児童にとっては、潮の引いた干潟での学習は大きな喜びであった。



高学年による定点観察

高学年は、1 m 四方の枠の中を観察し、砂や泥の状態、石の分布、生き物の分布をスケッチした。さらに、30 cm 四方の枠の中の泥を深さ20 cm まで掘り、その後、掘り取った泥をふるいにかけて、中にある生き物の種類と数を調べる定点観察を行った。低学年と中学年は干潟を歩き回り、スコップで干潟を掘り起こしたり、大きな石を動かしたりして生き物を採取した。生き物の見つけ方や採取の仕方にも慣れ、種類・数ともに多くの生き物を観察することができた。

⑥ 観察のまとめ

干潟観察後は学校に戻り、低学年は採取した生き物を手に取って観察をした。他校の友達に得意げに説明し合う姿も見られた。中学年は、生き物についての特徴をとらえるためにスケッチに取り組んだ。

高学年は、他校の友達と採取した生き物の情報交換をしながら「生き物マップ」を作成した。子どもたちは干潟に多くの生き物が生息していることに、改めて大きな驚きと喜びを感じていた。また、学習のまとめや感想を各校の児童が報告し合い、かわり合いを深めることもできた。



干潮時に広がる大島湾干潟



採取した生き物の観察



「生き物マップ」の作成

<参考> 交流当日の授業内容

◇3校時：教科等による交流学习

(各学級に分かれての教科・道徳等の交流学习、人間関係作りゲーム、全校体育等)

◇4校時：干潟観察会の事前授業

(干潟観察会の指導者「(株)総合科学」による授業例：「波の実験」、「水の汚れ調べ」、「ヒトデの裏返し観察」等)

◇昼 食：各学級に分かれての交流給食

◇5校時：湾干潟観察

(干潟に移動しての観察会)

◇6校時：観察のまとめ

(学校に戻り見つけた生物の観察とそのまとめ)



合同体育(キックベースボール)



干潟観察を通してかわり合う

(3) 実践例2 《ふれ合い交流会》

本校と隣接するように、高齢者及び知的障害者のための福祉施設がある。毎年、その施設との交流学習を教育課程に位置づけ、豊かな心の育成に向けて継続的に取り組んでいる。

交流学習では、高齢者や障害者の方々とのふれ合いを通して、「だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする」、「支え合い助け合うことの大切さと喜びを体験する」ことの2点をねらいとしている。

学習活動としては、1学期に「ふれ合い交流会」及び、秋に「地区合同運動会」を行い、園生の方々とゲームやスポーツを通して年間2回の交流を図っている。

児童も施設の園生の方々も、共に楽しみにしている活動になっている。

【「ふれあい交流会」実施計画】

1 ねらい 施設の園生の方々とふれ合い活動を通して、心の交流を図る。

2 児童会のめあて 「みんなが笑顔になる楽しい交流会にしよう」

- ・ 笑顔で話しかけよう（あいさつ、応援）
- ・ 移動をするときは手をつなごう

3 参加者

○ 小学校 児童（22名） 教職員（7名）

○ 施設 園生（83名） 職員（19名）

4 内容（プログラム）

(1) はじめの会

- ① はじめの言葉 ② 校長先生の話
- ③ 自己紹介と握手 ④ グループごとに活動の確認

(2) 全体での交流 「もうじゅう狩りゲーム」

(3) グループでの交流

- 緑班 「箱積みゲーム」（講堂）
- 黄・赤班 「キックベースボール」（運動場西）
- 青班 「フライングディスク」（運動場東）

(4) 終わりの会

- ① 児童代表あいさつ ② 園生あいさつ
- ③ 園生の方へのプレゼント ④ 握手でお別れ

※ 交流会を意義深いものにするために、5・6年生が事前訪問し、話合いやゲームをしてふれ合いを深めている。



握手をしながら自己紹介



全員による「もうじゅう狩りゲーム」



歓声が上がったキックベースボール



事前訪問して計画作りをする

(4) 取組の成果

継続的な交流学習の取組により、子どもたちは様々な人との望ましいかかわり合い方を身に付けている。

「3校交流干潟観察会」では、

- 友達といっしょに考えたり、行動したりする喜びを味わうことができる。
- 友達と意見を交わす事を楽しむことができる。
- 友達と積極的に交わりながら、よりよい考え方や価値を追究することができる。

以上のような成長を、一人ひとりの子どもの姿から確認することができるようになってきた。

また、交流会の子どもたちの感想からも、他者とのかかわり合いを積極的に楽しみ、その取組に対して充実感を味わうことができた。

みなさん、お元気ですか。きのうはおじゃまさせてくださって、ありがとうございます。
ぼくは、ドッジボールをするのをとても楽しみにしていました。それで、ぼくが投げた時みんながほめてくれたのでうれしかったです。
ひがた観察では、見ることでできない生き物がいて、とてもおもしろかったです。イカとか見つけた人がいたので、すごいなあと思いました。ひがた観察に行ってきたです。ありがとうございました。

【交流校からの手紙(交流干潟観察会)】

交流会では、私たちは「笑顔でたくさん話しかけよう」という目標を作りました。
はじめの言葉ではとてもみんながうれしかったけれど、聞いているみんなが笑顔だったので、きんちようも和らぐことができました。はく手ももらったのでうれしかったです。
キックベースボールでは、かけ声やおうえんはうまく言えなかったけれど、園生みなさんが私の番になったらすごく応援してくれて、とてもやる気になり高くボールをけることができました。園生みなさんにお礼を言ったら、「今度もがんばるんだよ」と言ってくれました。
交流会をふり返って、みんな笑顔だったので目標達成だと思いました。

【ふれ合い交流会の感想(6年生児童)】



授業後に交流学習の感想を述べ合う



交流学習による「人間関係作りゲーム」

3 取組を振り返る

同年齢の他校の児童生徒との交流や異年齢の方との交流など、交流には様々な形態がある。それぞれがどのような活動をするかによって、成果も大きく変わる。大切なことは、そのような機会が、へき地・複式・小規模校の子どもたちにとって必要な経験だということである。人とのかかわることを恐れず、自らがかわりを求めていく経験を重ね、自信をもって自分らしさを表現できるようにしたいものである。そして何よりも学校同士や地域との連携を積極的に進め、交流学習という機会を今後も広げていくことに努めたい。

Ⅲ－２ 小中連携教育の効果的な取組に向けて

１ 取組のねらい

県内には、小中合同校舎、隣接校舎等、互いの行き来が容易な環境にある小中学校がいくつかある。施設・設備面で近いからこそできることもあれば、実際の運営面では、授業やPTA活動等、相互の共通理解や歩み寄りが必要とされ、連携体制を築くことの難しさも多いようである。また、中1ギャップに象徴されるように、小学校から中学校へのなめらかな移行は、どの学校にも求められているところであるが、殊に小規模校においては、新しい人間関係を築くための力を養うなど、懸念されている点も多い。

小中連携のあり方や、義務教育としての系統的な教育活動の整備など、小中学校で現在行っている合同の教育活動等を見直し、今後の展望をもつことが必要である。

２ 取組の実例Ⅰ

多年齢集団におけるかかわり活動の深化（小中学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○限られた人間関係の中でのコミュニケーション能力や社会性を育む必要がある。 ○小中連携による系統的で一貫性のある指導が必要である。	○多年齢集団の中で学び合い、思いやりの心を育てる。 ○小中学校間の綿密な情報交換により、一人ひとりに応じたきめ細やかな指導体制を確立する。

(1) 取組の概要

本校は、離島にあり、幼稚園、小学校、中学校の子どもたちが同じ校舎で学んでいる。そのため、子どもの学習歴等を積み上げ、個人のよさや課題とその方途を記した「キャリアファイル」を作成し、生徒指導委員会で協議することで全職員が共通歩調で指導をしている。

この中で指導体制を見直すと、生徒指導や行事では、「小中で一緒にできるところは一緒にする」ということである。教師の立場においては、それぞれの校種の考え方にふれることができる。また、子どもの立場においては、上級生の姿を見て下級生が学び、逆に上級生は下級生に対する思いやりの気持ちや、「しっかりし

ないといけない」といった年長者としての自覚が生まれる。このように、連携を深めることはお互いを理解するとともに、幅広い活動の場を開くこともできる。

(2) 実践例『海外たすけあい募金活動』

① ねらい

○ 世界中にいる病気に苦しんでいる人、飢えに苦しんでいる人々が助かるために、少しでも自分たちができる協力として募金活動があるということを、赤十字の一員としてより多くの人に知ってもらう。

○ 今自分たちが感じている幸せを、多くの人に共有してもらうための募金活動として、一人でも多くの人を救えるように活動する。

この行事は、生徒たちで考えた上記の2つのことを目的として、昨年度までは中学校の生徒会行事として取り組んできたものである。島内の港を中心に活動し、船を利用する観光客や島民を対象に募金を呼びかけ、協力していただいていた。今年度は活動をさらに充実させるために、より多くの人にこの活動の存在を知ってもらい、趣旨を理解の上で協力をしていただきたいと考え、児童とともに島の全地区を回って募金を呼びかけようと考えた。

② 児童生徒による広報方法についての話し合い活動

活動を行うにあたり、世界で家を失っている人や食糧がなくて苦しんでいる人の写真を提示して、児童生徒に募金活動の趣旨を伝えた。その後、「募金活動を地域の人に知ってもらうために何ができるか」何をすればよいかを、生徒会長を中心として児童生徒で話し合った。その中で、「ホームページをつくる」、「ポスターを作って公用車に貼る」、「島内放送でお

知らせする」などの意見が出た。中には、「山の木を、募金活動しますという文字になるように剪定する」といった児童のユニークな意見も出て、発想の豊かさに生徒が感心していた。多かった意見は、「ビラを作る」、「旗を作る」、「ポスターを作る」、「回覧板に載せてもらう」であった。後日、生徒会で「ビラを作る」、「旗を作る」、そして、募金の協力に対して感謝の気持ちを表すために、工夫したデザインの「募金箱を作る」ことを決定した。



募金活動の広報方法を小学生に投げかけている様子



中学生を中心とした話し合い活動①



中学生を中心とした話し合い活動②



全員の意見を出し合う場面

③ 募金活動の準備活動

最初の話し合いで小学生が分担する作業を決定し、その後、各グループで中学生の指示のもとで活動した。作業では、中学生が全体を見てアドバイスをする場面が見られたり、小学生から気づきやアイデアが出てきて、中学生を感心させたりするなど、工夫を凝らしながら進み、着々と募金活動の準備が整っていった。

完成したビラは、生徒会長が作成した文書とともに世帯数分印刷し、自治会長を通して全世帯に配布した。



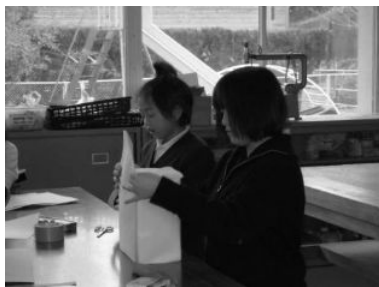
募金活動準備の話し合いの様子



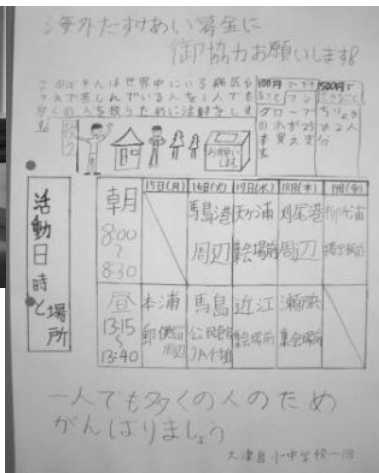
ビラづくりの様子



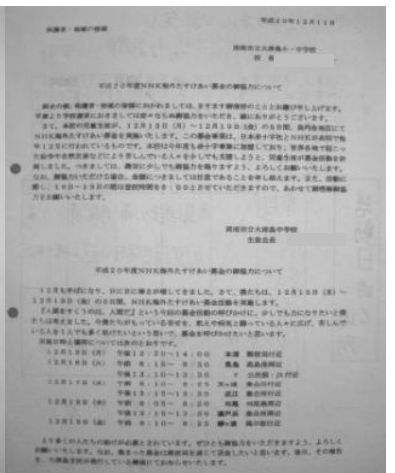
旗づくりの様子



募金箱づくりの様子



児童生徒が作成したビラ



校長と生徒会長からの依頼文書

④ 募金活動の実際

活動では、訪問する子どもたちを待っているお年寄りや、自分の地区に来る日には都合が悪いからと言って別の地区までわざわざ来られて募金してくださる方、「ごころうさま」、「がんばって」と声をかけながら募金をしてくださる方など、当初の予想をはるかに超える地域の方々の理解や協力をいただき、その温かい心に子どもたちは大変感激していた。(写真1～3)

活動初日、中学生はなかなか大きな声で呼びかけができなかったが、地域の方の協力に元気づけられ、感謝の気持ちとともに期待に応えようと目を追うごとに声が大きくなっていった。小学生たちも「お願いします」と大きな声を出し、中学生を後押しした。活動中、地域の方が新聞社に投書して下さり、取材も受けた。(写真4)

活動の結果、昨年の金額の4倍以上である78,758円もの募金が集まった。これは、地域に出向き、直接地域の方とふれ合ったことが、地域の方の協力につながったからだのとらえている。小中連携によって、学校と地域が一体となった取組にもつながった。

期間中は毎日、朝の全校放送で前日の募金額と累計を報告し、期間終了後には、掲示物を作り、廊下に掲示した(写真5)。さらに、地域の方にお礼を伝えるために寄せ書きを作成し(写真6)、生徒会長が作成した文書とともに全世帯に配布した。



写真1～3 地域を歩き募金を呼びかける様子

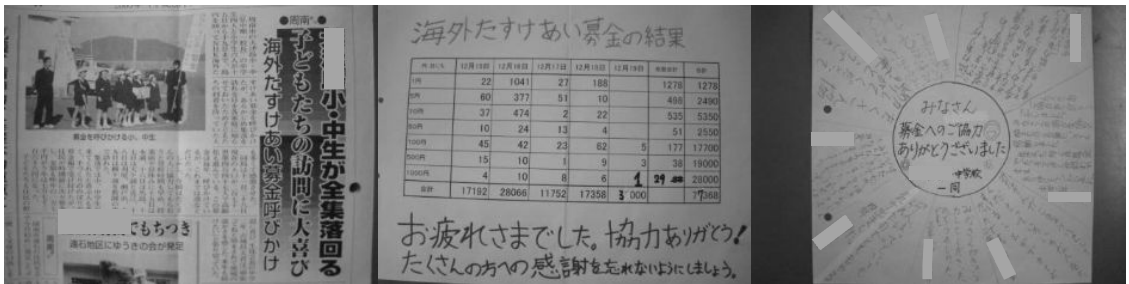


写真4 掲載された新聞記事

写真5 募金の結果報告

写真6 地域の方へのお礼メッセージ

⑤ 児童生徒の感想

- 児童A 募金活動でいっぱいお金が集まりました。海外の人に役立つといいと思います。
- 児童B 今日、昼休みに募金活動をしました。おばさんたちがたくさん募金をしてくれたのでうれしかったです。明日の募金活動もみんなを助けられるようにがんばりたいです。
- 生徒A 小学生がよく頑張ってくれたので、これからいろいろな活動に参加してもらい、力を貸してもらいたいです。

⑥ 自己を見つめる振り返りシートの工夫について

行事や話し合い活動では、児童生徒が自分の成長を感じ取ることができるように、振り返りシートを活用した。

これは、自分自身の振り返りと、他者とのかかわりにおける振り返りの2つの欄と、担当教師の記入欄からなっている。

特に、小中連携の行事では、小学生の振り返りシートに中学生からの欄を作り、間近に見ていた中学生が小学生にコメントを書くようにしている。これを

⑤ 振り返りシートの活用（委員会、行事・話し合い活動時）

活動の振り返りを児童生徒それぞれが行い、特に児童の振り返りに対しては、教師からのコメントだけでなく、近くでかかわっていた生徒からもコメントを書いてもらい、返却している。



委員会活動の様子

⑥ 小中合同の話し合い活動

生徒会行事を取り組むにあたり、小中合同の話し合いの時間を設け、行事の目的を全員で理解し、内容について話し合っている。

(3) 取組の成果

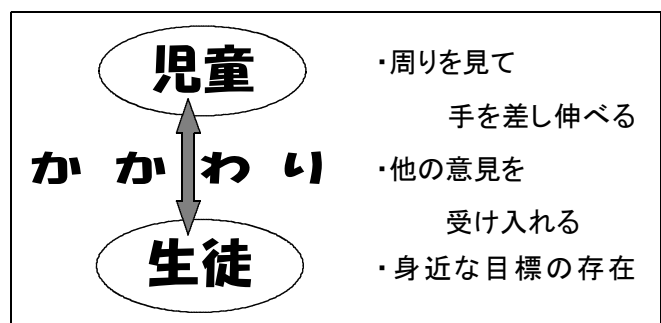
連携を深めるにあたり、子どもたち一人ひとりに責任の重さを感じさせると同時に、充実感を味わわせることができた。

小学生は中学生のリーダーシップをとる姿を目の当たりにすることで、下級生に対してしっかりしようという気持ちになった。特に、自分が楽しむだけでなく、周りへの心遣いや、他の意見を受け入れることができるようになってきた。

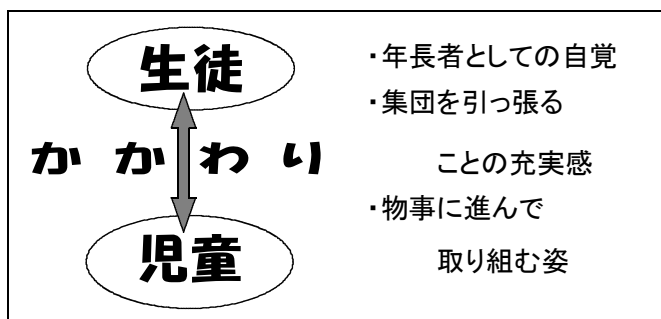
逆に、中学生は小学生とのかかわりを通して、少しずつではあるが、相手のことを考えた言葉遣いへと変容してきた。また、手本になろうという気持ちが向上し、集団を引っ張ることの充実感を味わえるようになった。

お互いが見られているという立場を理解し、物事に進んで取り組むなど、年長者としての自覚がもてるようにもなった。

今後も様々な連携の場を開拓し、児童生徒がお互いに切磋琢磨しながら、成長できるようにしていきたい。



小学生の成果



中学生の成果

3 取組の実例Ⅱ

小中合同行事・活動を通して促す学校と地域の活性化（小中学校）

課 題	課題解決に向けたキーワード
○学力や体力等、小学校段階からの課題を把握し、系統的にその向上を図ることが必要である。 ○「小学生らしさ」、「中学生らしさ」を生かした学校行事を精選する。	○授業参観やT T等により、指導方法や教員のよさを生かす。（小中連絡協議会、体験入学等の実施） ○学校や地域の行事を見直し、発達段階に応じた指導、内容を企画する。

(1) 小中連絡協議会

年度当初に全職員の参加のもと、開催している。小中の年間行事予定及びP T A活動を含む合同行事、生徒指導計画、研修計画等の確認を行う。そして、連携の視点を明確化し、情報交換をしながら共通理解を深める。

具体的には、児童生徒の生活面や学習面等についての実情や課題を明らかにし、それに応じた学校行事の見直しや研修の視点等を協議する。

(2) 合同での行事・活動

① 保小中秋季大運動会

保育園も加え、企画からすべてを合同で行っている。今では地域の伝統的な行事となっている。練習や係活動で中学生がリーダーシップをとる姿を目の当たりにし、小学生にとっては、中学生への憧れを抱いたり目標を立てたりすることを通して、中学校への見通しももてる点がよい。

② 小中文化祭

あくまでも企画は中学校であるが、昨年度から小学校の展示・ステージ発表を盛り込んだ。それぞれの学習の成果を発表する機会にもなっているが、合同開催で行うことのよさを生かすためにも、「小学生らしさ」、「中学生らしさ」を出したり、一緒になって学習する企画を設けたりするなど、内容を一層充実させていくことが望まれる。



小学生ステージ発表

③ 学校保健委員会

定期健康診断及び新体力テスト結果を相互に分析し、小学校段階からの課題を把握し、子どもたちの健康や体力の維持と向上を図っている。

④ 学校評議員会

P T A会長以外は、小中学校同じメンバーで構成している。小中学校9年間という視点から学校や地域の実情を踏まえて意見を聞くことができる点がよい。

⑤ 3世代クリーン作戦

地域の関係機関にも協力を要請し、実施している。家族での参加を小中学校で呼びかけ、島内のゴミ拾いを合同で行っている。子どもたちの様子を地域の方に知っていただく機会にもなっており、子どもたちにとっても、親子や地域の人とのコミュニケーションを深める機会にもなっている。



3世代クリーン作戦

(3) 次年度入学生体験入学

6年生を対象に、半日日程で体験入学を実施している。内容は、1年数学の授業体験、1年英語の授業見学を中心として、その他、学校生活の紹介をしている。安心して次年度の中学校生活を送ることができる配慮のひとつとして考えている。また、この時を利用し、中学校の教員は、次年度入学生の児童理解をより深めるとともに、小学校の教員は、現中学1年生の成長の姿を見ることができる。



英語のグループ学習を見学



小学校で陸上競技指導

(4) 授業参観、T Tでの授業

年度当初の小中連絡協議会で互いの研修計画を確認し、それに基づいての研究授業や授業参観日などを実施している。その際、気づき等を伝えることが授業改善の一方策であるという考えから、授業評価票を活用している。子どもたちの授業に向かう姿勢や指導方法等、参考になる意見が聞け、連携の際の話題にもなり、有効である。

また、音楽会へ向けての合唱指導、陸上大会へ向けての競技指導、英語活動等のサポートとして、中学校の教科担当が小学校へ出向き、T Tの形で指導にあたっている。こういった機会も児童の実態把握に役立っている。

授業評価票	氏名 ()	教師用		
～よりよい授業づくりのために～				
参観した授業 クラス () 授業者 ()				
(1～4でなくてはまるところに○、5は感想を記入)				
	たいへんよい	よい	少し物足りない	物足りない
1	生徒は授業に集中して取り組んでいた。			
2	生徒は積極的に発表や活動をしていた。			
3	教師の説明や発言はわかりやすかった。			
4	教師は、生徒一人一人に気を配っていた。			
5	本日の授業の気づき			
※小学校の先生からのコメント 「こんなに発言があるのは、日頃の学級経営、授業づくりが素晴らしいからだと思います。」 「課題提示が早く、子どもたちの反応も早いので授業がスムーズに流れていました。」				

授業参観で活用している授業評価票

(5) 小中合同 P T A 活動

児童生徒数が少ない学校では、P T A関係者も少ないため、小中学校合同でP T A活動を行う方が、効果的である。保護者同士のコミュニケーションを深める機会にもなり、参加もしやすい。例年、小中合同で行っているP T A活動は、「球技大会」、「海岸清掃（3世代クリーン作戦）」、「心肺蘇生法（A E D）講習会」、「研修視察旅行」、「奉仕活動」などである。

このような活動が小中学校教職員・保護者の交流の場ともなり、協同の活動の基となる。小中P T Aの組織の編成については、より効率的で学校・保護者・地域が一体となって取り組めるようにしていくことが望まれる。



海水浴場の清掃



A E D講習会

4 取組を振り返る

小中の連携において、中1ギャップに象徴されるように、小学校から中学校への入学後スムーズに学校生活に慣れ、学習活動ができるかが最も心配な点である。そのためにも小中学校で相互理解をすることは欠かせない。小学校の学級担任制から中学校の教科担任制へ、児童会と生徒会の運営の違いなど、それぞれの校種の特徴を生かしながら、共同実践をしていく必要がある。

小中学校双方に兄弟姉妹も多く、行事等の度に話題になることも多い。ちょっとした職員室での会話の中にも、そうした子どもたちのことを思う発言がある。日々の小さな積み重ねを連携の基本とし、コミュニケーションをより深めながら、小中学校のもつ課題や気づきを互いに伝え合い、9年間の見通しをもった指導体制づくりが重要である。折しも、新学習指導要領への移行期であり、また学力向上が叫ばれている昨今、そういった視点をもった小中連携も考えていかななくてはならない。地域・保護者へも情報発信し、協力体制を構築しながら、よりよい連携を進めていきたいものである。

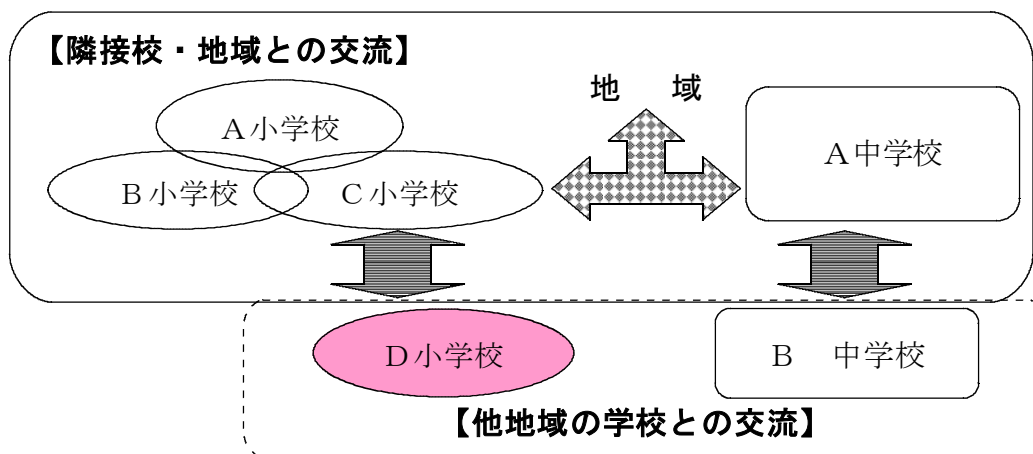
< 資 料 >

学校間交流の実態について

小規模校（へき地・複式教育関係校）における交流の実態

～交流学習実態調査結果より～

交流の形態



交流の内容

小学校間交流

- 各教科の合同授業や総合的な学習の時間や学級活動等での交流（国語、算数、理科、生活、体育、音楽、図工等）
- 社会見学、修学旅行、宿泊学習、水泳記録会、持久走大会、陸上記録会、集会活動、体験活動等

小中学校間交流

- 体育、音楽、総合的な学習の時間の合同授業
- 体験活動
- ボランティア活動
- 出前授業（中学校の教員が小学校で授業）

地域との交流

- ふるさと学習や教科の学習における地域人材の活用
- 地域の伝統的な行事への参加と交流

交流の効果

- ◎ 子どもたちの社会性を育む機会となる。
（「人間関係を築く経験ができ、友達も増える」「多様な意見にふれたり、仲間をつくったりすることで、自分づくりに役立てることができる」「小1プロブレム、中1ギャップにも対応できる」）
- ◎ 授業が活性化する。
（「学び合いの授業を展開しやすい」「多様な価値観に触れる表現教科や道徳、特別活動等における学習で、特に効果的である」）
- ◎ 教職員にとってよい刺激となる。
（「平素の授業形態と異なった学習形態で指導できる」「中学校では、教科の専門性を生かした指導が充実する」）

実態調査の結果の概要

1 目的

県内のへき地・複式・小規模校の交流学习の実情を把握し、今後の取組に生かすとともに、交流学习についての情報提供を行う。

2 調査の対象

県内へき地指定校、複式学級を有する学校

3 調査の実施

平成20年11月実施

4 調査の内容

- ① 各市町内の小規模校で交流学习を進めている学校数
- ② 交流校と交流内容（年間実施回数、市町の補助の有無）
- ③ 他市町、他県の学校との交流学习の実態
- ④ 他市町、他県の学校との交流学习の内容

5 調査結果

① 各市町内の小規模校で交流学习を進めている学校数

- ◆ 山口県内小規模校の約95%が他校との交流学习を実施している。

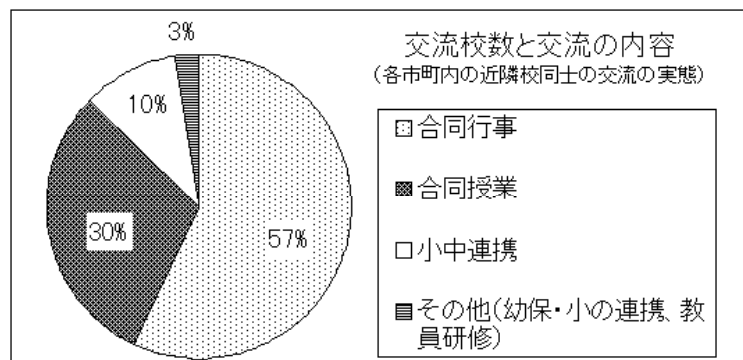
へき地・複式関係校（へき地指定校と複式学級を有する学校）の交流の実態			
小学校		中学校	
へき地・複式関係校数	交流実施校数	へき地・複式関係校数	交流実施校数
101校	97校	13校	11校

※和木町、平生町、山陽小野田市には、へき地複式関係校はない。

② 交流校と交流内容

- ◆ へき地・複式関係校114校（95%）で、197項目の交流を行っている。
- ◆ 小規模校の交流内容としては、社会見学や修学旅行などの行事や合同学習といった交流がほとんどである。
- ◆ 中学校区が同じである小学校同士で交流している場合が多く、年間複数回実施している学校が多い。
- ◆ 合同授業やインターネット等による交流（TV会議）も見られ、学び合いの授業が充実するよう工夫している学校も多い。
- ◆ 校種間でなめらかな移行が進められるよう、小中連携や地域素材を生かした系統的な総合的な学習を進めるなど、多様な形態がある。

同一市町内の取組の具体（例）	
学校の実情	交流の内容
離島と中規模校	各教科、総合、特別活動等の合同授業を実施。年間20日。
近隣小規模校同士	双方向テレビ会議システムを活用した合同授業を実施（年間3～6回程度を予定：学校により、実施回数が異なる）
近隣小規模校同士	相互の学校に出向き、国語、算数、体育などの教科や特別活動で合同の授業や活動を実施（各学期1回、計年3回）
近隣小規模校同士	合同社会見学（1～6年、年1回）、音楽、体育、算数、図工の時間の合同授業（1～6年、年2回）
近隣小規模校同士	5学年：社会見学（年1回）、6学年：修学旅行（年1回） 水泳大会・音楽祭・体育大会（年1回）
近隣小規模校同士	5学年：宿泊学習（年1回） 6学年：修学旅行（年1回）
近隣小規模校同士	修学旅行（事前指導含め年間2～3回）、宿泊学習（事前指導含め3～4回）、陸上記録会合同練習（年間1回）
離島と中規模校	定期健康診断、社会見学、遠足、音楽祭練習、音楽祭、スポーツテスト、持久走大会、児童集会（年間14回）
小中併設校	諸行事（始業式・終業式、運動会、学習発表会、音楽会、鍛錬遠足等）及び合同学習（体育、音楽等）、特別活動（集会、委員会等）で交流
中学校区内の小中連携	小中ボランティア活動（年間1回）
中学校区内の小中連携	中学校教員による出前授業（年間6回実施）
中学校区内の小中連携	小中合同文化祭（年間1回）



③ 他市町、他県の学校との交流学習の実態と内容

- ◆ 他市町や他県の学校と交流を進めている学校もあるが、実施校数は、10校と少ない。
- ◆ 宿泊を伴ったり、地域の特性を生かして体験活動を重視する取組が多い。TV会議システムや特産品を送付し合うなど、工夫した取組も行われている。

他市町・他県との交流の具体	
学校の実情	交流の内容
他県との交流	5・6学年：宿泊学習（2年に1回）、1～4学年：ふれあい交流（2年に1回）、海水浴交歓会（年1回）
他市町の学校との交流（島の学校と山の学校）	○夏…サマーキャンプ「海辺の教室」（1回） ○冬…スキー合宿（1回）

編 集 協 力 校

<小学校>

岩国市立神東小学校

美祢市立豊田前小学校

柳井市立鳴門小学校

下関市立田耕小学校

周南市立大島小学校

阿武町立宇田小学校

周南市立大津島小学校

長門市立向津具小学校

山口市立柚野木小学校

<中学校>

周防大島町立情島中学校

長門市立向津具中学校

萩市立大島中学校

事 務 局

教育庁義務教育課長

中馬好行

同課指導班教育調整監

今鶴勇二

同課指導班主査

西田稔

同課指導班指導主事

足立直之

